

宏智禪師頌古百則の研究（一）

佐藤悦成編

緒言

曹洞宗では開祖道元禪師以来、只管打坐を標榜して、公案を用いた修行を避けている。それは、公案の内容を学習することで知解に陥り、実修に裏付けられた「証」に至れないと考えるからである。言い換えれば、文字を学んでの理解が疑似体験となる危険性を含むからである。そのような視点に立つ曹洞宗で、道元禪師の著した『正法眼蔵三百則』以外では、唯一『従容録』のみが許容されている。従容録の原点は、宋代に黙照禪を主導した宏智正覚の編集した『宏智禪師頌古百則』である。祖師の行実の要点を本則とし、それに宏智が頌を付して要諦を説いた。宏智正覚を道元禪

宏智禪師頌古百則の研究（一）（佐藤）

師は「宏智古仏」と尊敬したことはよく知られている。

本論考では、先学の成果を参考にしつつ、独自の考察を進めることを目的とした。従来は、坐禅体験に基づいた提唱の形態か、学問的考察による和訳の形態でまとめられてきた。本稿では、積意に重点を置き、宏智が伝えようとした点に迫ろうと試みた。

大学院に在学する諸君とともに行った研究が基本となっている。今回の（一）に参加してくれたのは、佐藤清道氏、伊藤秀真氏、大橋崇弘氏、西川慈恩氏、杉原修一氏を中心として、林徳立氏、大塚将弘氏、関美那子氏の参加も得た。

今後、百則までの考察を目指すか、参加諸氏の理解力の進化は著しく、成果としてまとまることを期待している。

凡例

- 一、本稿の底本には『大正大藏經』四八卷所収『宏智禪師広録』巻二「長蘆覚和尚頌古拈古集」を用いた。
- 一、本則と頌古の本文は底本の表記を踏襲した。
- 一、訓読文・和訳・釈意・註記については新字表記とした。
- 一、和訳については丁寧体を用い、釈意では通体を用いた。
- 一、原文には、「臨濟」を「臨際」、「青原」を「清源」とするなどの表記がある。その場合は、訓読文・和訳・釈意では通例用いる表記とした。
- 一、原文に註が付されている場合、その旨を註記した。

第一則 世尊陞坐

【本則】 擧。世尊一日陞座。文殊白槌云。諦觀法王法。法王法如是。世尊便下座。

【訓読】 挙す。世尊 一日陞坐したまふ。文殊 白槌して云く、諦觀法王法、法王法如是と。世尊 便ち下座したまふ。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。釈尊はある日、弟子や信者のために説法を行うために高座に上られました。その時、法会を司っていた文殊菩薩が槌を打って聴衆に告げました。「いま行われた世尊の説法をよく会得しなさい。世尊の御教えはいますべてが示されま

【釈意】

説法場所は記されないが、靈鷲山であろうか。いつものように、弟子・信者を前にして釈尊は教え示すために法座にあがって説法始めようとされたその時、法会の司会を務めていた文殊菩薩が、突然、説法の終りを告げる槌を一下していった。「諸君は、釈尊の御教えをよく観なさい。釈尊の御教えは、今、余すところ

した」と。釈尊はその言葉が終わると同時に、説法
の場から降りられました。

なくすべてが示されました」と。釈尊は文殊菩薩のことばをお聞きになると、文殊菩薩のことばを認めて法座から降りてしまわれた。文殊菩薩は、釈尊がそこにおられることで、真理は余すところなく現れており、更に言葉を用いて加えるものはないと、説法の終わりを告げたのである。

求めるべき真実は、特別なことばで高邁な思想を教え示すことではなく、今、ここに釈尊のみではなく、弟子・信者のそれぞれが存在するという事実こそが真理そのものであるというのである。それをことばで表した瞬間に真実から離れてしまうことを示したのである。ことばや文字の解釈は各人様々である。自らの経験や過去が理解の基礎となっている。そのため普通の真実をことばで表すのは困難であり、分別・執着を交えず観たままこそが真実であると、文殊菩薩は聴衆に教えたのである。ことばに依らないという点では「拈華微笑の話」にも通じる内容である。

【頌】 頌曰。一段真風見也麼。綿綿化母理機梭。織成古錦含春象。無奈東君漏泄何。

【訓読】 頌に曰く。一段の真風 見るやまたなきや。綿綿として化母は機梭を理め、織り成す古錦は春象を含む。東君の漏泄をいかんともすることなし。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいいました。釈尊が説かれた真実の教えを、皆さんは会得できたでしょうか。古より絶えることなく春に新たな命を生み出す母なる神をはじめとして、四季を司る神々は機梭を往復させて布を織ってきました。古くから織り続けられてきた錦の布には、春の景色をはじめとして、時の移り変わりが途絶えることなく織り込まれています。いま、春の神様が、春の訪れを人々に思わず知らせていません。

【釈意】

「二段の真風」は、釈尊が法座に上り、文殊菩薩のことばを聞いて、座を降りられたことを云う。宏智禪師は、聴衆のそれぞれが正しくその説法を会得したかと質している。無限の過去世より絶えることなく、あたかも梭を左右に送って、休むことなく布を織るかのように、教えの主である諸仏は真理を説き続けてこられた。御仏が伝えてこられた真理とは、春には春の景色が生じ、ありのままに四季の移り変わりが現れることである。春の神が春の景色を毎年織り成し続けているように、釈尊も真実の教えを説き続けている。それはことばではなく、そこに釈尊がおられること、聴衆がそこに居ることが真実の表れなのである。文殊菩薩はその真実を釈尊の陞坐に観て、槌を一下したのであるが、陞坐はこの場の事実をいうのであり、坐禅でも作務でも洗面でも同じである。釈尊がそこにおられることが仏法現成であり、人々それぞれに今この時、ここで仏法は現成しているというのである。東君の漏泄とは、釈尊がそこにおられるだけで、ことばで説かれなくても説法そのものであり、仏法そのものであることを云う。

【語彙】【拳】問題を提起する時のことば。学人に問話の始まりを知らせる。【陞坐】説法を行うために法座に上ること。【文殊菩薩】

智慧第一の菩薩。【白槌】白は申し上げる、の意。【法王】ここでは積尊のこと。【綿綿】絶えることなく続く意。【化母】万象を創造する神。生み出すところから母という。ここでは過去仏をいう。【機梭】機織りで横糸を通す道具。【古錦】過去から絶えることなく伝えてきた真理を、織り続けられた錦の布に喩えた。積み上げた時間を「織り成す」といい、無限の過去から真実の営みは続いており、春夏秋冬に移り変わることをいう。【東君の漏泄】積尊がそこにおられるだけで真理が滲み出している、との意。そのため、文殊菩薩はつい槌を打ってしまった。それを「奈何ともすることなし」といった。「諦観法王法、法王法如是」は本来余計なこと。

第二則 達磨廓然

【本則】 擧。梁武帝問達磨大師。如何是聖諦第一義。磨云。廓然無聖。帝云。對朕者誰。磨云不識。帝不契。遂渡江至少林。面壁九年。

【訓読】 擧す。梁武帝 達磨大師に問う。如何なるか是れ聖諦第一義。磨云く、廓然無聖。帝云く、朕に對する者は誰ぞ。磨云く不識。帝契わず。遂に江を渡りて少林に至り、面壁九年。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。梁の武帝が達磨大師に質問しました。「どのような教えが仏法の最奥なのでしょううか」と。達磨大師は答えました。「すべてのこだわりを捨てて、たとえば尊いという分別さえ生じない心を得ることです」。武帝は再び聞きまし

〔釈意〕

仏道の最要は、凡聖、迷悟の分別がない心の確立であるとする達磨にとって、帝としての自分が、祖師としての達磨を見ているという立場を離れられない武帝の立場は妄執にほかならない。武帝が自分という存在を中心に置いてすべてを捉える限り、それは彼我の見であり、また相対に滞る分別というべきである。知解を離

た。「悟りとは分別が生じないことをいうのなら、ここで今、わたしと相対している貴方自身を、貴方はどのように説明するのですか。わたしは武帝であり、あなたは達磨大師ではありませんか」と。達磨大師は答えました。「ですから、そのような自己への執着がある限り、真実を識ることはできないのです」。武帝には達磨大師の教えが理解できませんでした。ついに達磨大師は梁の国での化導をあきらめ、長江を渡って北へ歩を進め、その頃既に信仰の場となっていた嵩山少林寺に居を定めたのです。自らの教えを中国の人々が受け入れられる時が来て、更に、自らの法を伝えるべき器量の弟子が現れるまで、ひたすら坐禅を行じて待つことにしたのです。

【頌】 頌曰。廓然無聖。來機逕庭。得非犯鼻而揮斤。失不迴頭而墮甌。寥寥冷坐少林。默默全提正令。秋清月轉霜輪。河淡斗垂夜柄。繩繩衣鉢付兒孫。從此人天成藥病。

【訓読】 頌に曰く。廓然無聖、來機逕庭。得は鼻を犯すに非ずして斤を揮い、失は頭を廻らさずして甌を墮す。寥寥として少林に冷坐し、黙然として正令を全提す。秋清くして月霜輪を転じ、河淡くして斗夜柄を垂る。繩繩として衣鉢児孫に付す。此れ従り人天藥病と成る。

れて、王としての自分、祖師としての達磨という幻の器を捨ててみれば、自分も達磨もただ仏というしかない存在であったことに気づいたはずである。その意味で廓然無聖であり、不識である。さらに、嵩山での面壁九年の実践は、聖諦第一義の体現である。廓然無聖の語には、帝位にある武帝に対して、儒家の用語を元にして説いたとも考えられる。廓然大公（物事にこだわらず、公平なことをいう。聖人の心を学ぶ君子の心構えをいう）、大公無私（儒家がいう利己心がなく、公平で正しいこと）などが想起される。

宏智頌古の本則は、『碧巖録』第一則と比較して、かなり簡略である。宏智はこれですべて事足りると判断したのであろう。ことばが多くなれば、それだけことばに迷う者が出てくることを避けたいといえる。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。祖師として虚妄分別を既に断じた達磨と、世俗の価値観から脱することのできない武帝との間には、大きな隔たりがありました。達磨は、武帝を相手に抜群の器量を發揮しましたが、一方で、あまりにもあっさりとききらめてしまいました。第一義諦においては故事にある匠石という大工が手斧を使って見事な技を見せたように、水際だった手際の良さで本領を發揮しましたが、世俗諦においては孟敏の異才を見抜いた郭林宗のように武帝をうまく導くことをせず、長江を渡って梁を去ってしまいました。その後、達磨は少林寺において世俗との関わりを絶つてひたすら坐禪を行い、端坐することによって仏法のすべてを体現しました。

その様を喩えていうなら、爽やかな秋の夜に、冷えてゆえとした碧空を時とともに名月が東から西に渡ってゆきます。その同じ天空には天の川が淡く帯となって流れ、北斗七星も時とともに動いてその柄を

宏智禪師頌古百則の研究(二) (佐藤)

〔釈意〕

冒頭で、廓然無聖と記して達磨を表し、武帝との境地の隔たりを表現している。得を第一義諦の達磨、失を世俗諦の達磨とみただけは、武帝の最初の質問が「聖諦第一義」であったことによる宏智の解釈と理解したことによる。郢人の鼻についた泥を落とした匠石の力量を喩えて得とするのは順当であるが、自らの落ち度で割れた甌は振り返る価値もないとした孟敏に達磨を当てるだけでは違和感を覚える。ここは、孟敏にそのわけを尋ねて異才を見抜き、遊学させて大成に導いた郭林宗となることを自ら避けた達磨を、宏智はあきらめがよすぎる(失)としたのではないであろうか。仏法は第一義諦のみで成り立っているのではない。人々を導き救う世俗諦があつて完成するのである。

仏法は時の流れに埋没することなく、常に真実を指し示して脈々と受け継がれ、今に到ることを後半の句は表している。

地に近づけてゆくようなものです。そこには、人の計らいの及ばない真実の姿（諸法実相）があるのです。

達磨の法は、絶えることなく祖師から祖師へと連綿として相続され、今の我々はその大きな恩恵を被っています。達磨が西来したことにより、心の病を治す薬を得たのです。

【語彙】
【逕庭】 広いと狭いの意。【冷坐】 ひたすらの意。冷は心を動かさないことの喩え。【霜輪】 霜は、秋を受けての語。冷え冷えとしたの意。輪は天空の円を指す。【斗】 北斗七星のこと。時間の経過で夜空を移動し、ひしゃくの柄が地面に近づくようにみえることをいう。

第三則 東印請祖

【本則】 擧。東印土國王。請二十七祖般若多羅齋。王問曰。何不看經。祖云。貧道入息不居陰界。出息不涉眾緣。常轉如是經。百千萬億卷。

【訓読】 挙す。東印土の国王、二十七祖般若多羅を請して齋す。王問いて曰く、何ぞ看経せざるや、と。祖云く、貧道入息陰界に居せず、出息衆縁に涉らず。常に如是の経を転ずること、百千万億卷。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。東インド（現スリランカ）の国王が、釈尊より二十七代目の祖師にあたり、菩提達磨の師でもある般若多羅尊者を招いて食事を供養しました。供養が終わって般若多羅尊者は帰ろうとされたので、国王は呼び止めて云いました。「今日はなぜお経をお読み下さらないのですか」と。それを聞いて尊者は、「わたしは息を吸う時はただ吸うだけで、現実世界の欲望や執着に迷いませんし、息を吐く時はただ吐くだけで、欲望や執着に迷わされません。このようにして真実の教えをいつも示して日々を過ごしているのです」と。

〔釈意〕

古代インドの慣習で、信心深い国王は祖師方を招いては功德を積むために食事を提供したという。この則の主題は、スリランカの国王が般若多羅尊者をお齋に招いたところから始まる。食事を終えて、慣例に従っての經典の誦誦が行われるはずが、行われないままに尊者は帰ろうとした。国王は不審に思い、呼び止めて「なぜ今日は、わたしの供養への功德を戴くことができないのか」と不満を漏らした。尊者は、見返りを求める心があ
る限り、真の供養ではないことを教えるために次のように説いた。

「人は常に自分を離れることができずに、自分という主観で外の世界を捉えているから、欲望や執着を心に生じさせて迷うのである。また一方で、外の世界は常に客観世界として存在しているように思っているが、わたしが捉えた自分の心の反映であることを忘れているから迷うのである。しかし、仏の教えを会得すれば、そのような自我を離れることができるのだ」と。

日常の中で分別妄執を離れることが仏法の枢要であり、ブツダの教えが記された經典にはその点が記されている。仏法を信じると言うことは、単に説法を聞き、經典を誦誦することではな

く、ここに存在する自分を、正しく自身であきらかにすることなのだ、と教示したのである。

【頌】

頌曰。雲犀玩月璨含輝。木馬游春駿不羈。眉底一雙寒碧眼。看經那到透牛皮。明白心超曠劫。英雄力破重圍。妙圓樞口轉靈機。寒山忘卻來時路。拾得相將攜手歸。

【訓読】

頌に曰く。雲犀 月を玩んで璨として輝を含み、木馬 春に遊んで駿にして羈されず。眉底一雙 碧眼寒し。看經 なんぞ牛皮を透るに到らん。明白の心 広劫を超え、英雄の力 重圍を破る。妙円の樞口 靈機を転ず。寒山 來時の路を忘却せば、拾得 相いひきいて手を携え帰る。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。夜空で犀牛のような形をした雲が、まるで月をその角でもてあそんでいるように浮かんでいます。その雲は月の光を受けて輝きを放っています。また、木馬が春の野原で誰にも邪魔されることなく思うがままに跳ねて遊んでいます。般若多羅尊者はすべてを冷静に見通しています。国王に真実を説いたのです。ただ經典の文字を誦誦するだけで、どうして仏法の最奥を得ることができよう、と。

【釈意】

常に形を変えて空を漂う儂い雲が、真実の月の光を浴びて今を輝かせている。それは、人として仮有である存在が、ブツダの教えを得ることで迷いを脱して実相を会得したことを示している。色即是空の立場と言ってもよい。野を駆ける木馬という分別を超えた存在が、春という現実を楽しんでいる。それは、真理に裏付けられてこそ現実の存在を仮有として肯定することができることを示している。空即是色の立場といってもよい。ブツダの教説を真に会得した般若多羅尊者には、文字解釈だけのまやかしは通じない。經典を読破して、ブツダの教えを理解した

ブツダの教えは長い時間を超えて変わらず今に伝わり、その教えはまるで英雄が敵を撃破するように、人々の心の煩惱を打ち破つてきました。すべてを備えていて、欠けたところのないブツダの教えは、人々を救う偉大な働きを果たしてきたのです。それはまるで、寒山が来た道を忘れてしまったなら、拾得がその手を引いて家に帰るようなものです。

つもりになつていても、知解によつて眞実を会得することはできないのである。看經とは換言すれば、諸法実相たる目前の眞実を正しく把握することといつてよい。ただ文字を追うだけではないのである。

すべてを明らかにしたブツダの教えは、時と所を超え、人々に働きかけて、煩惱の囲みを打ち破り、欠けたところのない教えは、人々の仏心に働きかけて、迷いの世界から自由自在の世界へと導くのである。

喩えにいう、寒山が来た道を忘れたというのは、今の人々の姿そのものであり、自らが本来仏であることをうっかり見失っていることである。そこに拾得が現れて、寒山の手を引いて家に帰るといふのは、いつの時代にあつても、ブツダの教えを体得した祖師方が人々を仏の世界（眞実の自己）へと導くことを言うのである。国王（寒山）も般若多羅尊者（拾得）も仏そのものという。

【語彙】

【貧道】自身を指す謙遜語。【陰界】五蘊十二処十八界のこと。自分の存在と外世界のすべてを指す。【如是經】自身の在り方のもの。わたしという存在がここに生きている眞実をいう。【牛皮】經典を理解するだけではブツダの教説を会得できない。

第四則 世尊指地

【本則】 舉。世尊與衆行次。以手指地云。此處宜建梵刹。帝釋將一莖草。插於地上云。建梵刹已竟。世尊微笑。

【訓読】 挙す。世尊衆と行く次いで、手を以て地を指して云く、此の処に宜く梵刹を建つべし、と。帝釈一莖草をもつて、地上に挿んで云く、梵刹を建つること已に竟んぬ。世尊微笑す。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。釈尊がお弟子たちとともに行脚していたところ、たまたま通りがかつた場所を指さしていわれました。「ここにお寺を建てましょう」と。その時、帝釈天が一本の草を地面に差し挟んでいました「これでお寺を建て終わりました」と。それを聞いて釈尊は微笑されました。

【釈意】

帝釈天は、釈尊正覚の後、梵天とともに説法を懇請した（梵天勸請）ことで知られる。本則は釈尊の旅に同行していた時のことであろう。釈尊は旅の途中で弟子達の境地を試すことを思い立ち、ここに伽藍を建てようといった。元来、釈尊にとってこの世界すべてがそのまま伽藍である。それは「常在靈鷲山」と同様である。にもかかわらず、強いて伽藍建立を告げるのは、別の意図があると考えなくてはならない。帝釈天は、この世界のあらゆる場所（眞理）は如実に現れており、仏法現成ゆえにこの世界として成立している、という釈尊の心を見抜いて一本の草をもって応えた。そして、釈尊は「拈華微笑」と同様にほほえんで帝釈天の境地を認めたのである。

【頌】

頌曰。百草頭上無邊春。信手拈來用得親。丈六金身功德聚。等閑攜手入紅塵。塵中能作主。化外自來賓。觸處生涯隨分足。未嫌伎倆不如人。

【訓読】

頌に曰く。百草頭上無辺の春。手に信せ拈じ來つて用い得て親し。丈六の金身に功德聚まる。等閑に手を攜えて紅塵に入り、塵中能く主作る。化外自ら來賓す。觸處生涯分に隨つて足る。未だ嫌わず伎倆の人に如かざること。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。冬が過ぎれば、この世界のすべての草木に春が訪れます。帝釈天は、たまたま手に触れた草を地に立てて釈尊の心にかないました。釈尊には無量の功德が備わっています。正覚の後、梵天と帝釈天の懇請により、たまたま此岸に戻り、この世界での化主となりました。しかし、釈尊だけではなく、誰でもどこに在つても自分のままであり、自己がそこに現成しています。ですから神の世界からも帝釈天がこの世界に來て釈尊に隨うのです。この世界の誰もが、今ここで主体的に存在して、人それぞれに無限の功德の集合なので、これ以上何を望むことがあるでしょう。他者

【釈意】

偈頌のことばはたまたま（等閑）だが、悟りを得た釈尊にとつては必然である。悟入すれば後は此岸への回帰である。還相でも布教でも化導でも異類中行でも仏向上でも、百尺竿頭上進一步でも表すことばはなんでもよい。彼岸から此岸へと回帰して、未悟の人々を救うのである。

を羨み妬む必要などどこにもないのですし、競い合うことは最初から必要ないのです。

【語彙】【梵刹】寺院のこと。【丈六金身】釈尊のこと。【紅塵】世間、世俗のこと。

第五則 青原米価

【本則】 擧。僧問青原。如何是佛法大意。原云。廬陵米作麼價。

【訓詁】 擧す。僧 青原に問う。如何なるか是れ佛法の大意。原云く、廬陵の米作麼の価ぞと。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。ある僧が「仏教の中で最も大切なことは何でしょうか」と青原行思に尋ねました。青原は「廬陵では米の値段はどれほどだろうか」と答えました。

【釈意】

仏法の大意は日常底にある。青原は米の値段という生活に直結する言葉を用いて、修行も日常の自分に根付いたもので無ければならないことを説いている。丹精を込めて米を作るように、日々の修行を続けていけば、本来の自己を会得できるのである。日常生活そのものが悟りであることに気づくべきであることを示している。

【頌】 頌曰。太平治業無象。野老家風至淳。只管村歌社飯。那知舜德堯仁。

〔訓読〕 頌に曰く。太平の治業に象無し。野老の家風は至淳なり。只管に村歌社飲す。那ぞ舜徳堯仁を知らん。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。平和をもたらす政治
いうものに枠組みは存在しません。田舎の習俗は素
朴で飾り気がないものです。村人はただひたすら飲
めや歌えの祭りをします。その人々が堯や舜といっ
た古代の理想的な皇帝の仁徳をどうして知る必要が
あるでしょう。

〔釈意〕

真の天下太平の時代に生きる者は、平和も動乱も意識すること無
く過ごせるものである。それを仏道修行に言い換えるならば、平
和と戦乱は悟りと迷いと言える。田舎の習俗は素朴で飾り気が無
いように、悟りとはそれを飾り立てたり、ありがたがるものでは
なく、地に足の着いたものでなければならぬ。村人はただひた
すら飲めや歌えの祭りを行い、堯や舜といった古代の理想的な皇
帝の徳を知らない。これこそ太平であることの証である。動乱が
あるから平和も存在するのであり、平和という概念が無くなつて
こそ本当の平穏な時代といえる。祖師や仏祖がどのように悟つた
かを知らずとも青原の教えを実践すれば悟りに至ることを説いて
いる。

〔語彙〕

【青原】青原行思（?〜740）。姓は劉氏。六祖慧能に就いて法を嗣いだ。【廬陵】中国の江西省にある米の産地。質の良い米が
とれることで有名だった。【野老】田舎おやじ。田夫野人。【至淳】質素で飾り気が無い様子。情が深く、真心があること。
【村歌社飲】村で民たちが春や秋のお祭りで酒を飲み歌うこと。【舜徳堯仁】古代中国で五帝と呼ばれ、善政を行った王である
堯や舜の仁徳。

第六則 馬祖白黒

【本則】 擧。僧問馬大師。離四句絕百非。請師直指某甲西來意。大師云。我今日勞倦不能爲汝說。問取智藏去。僧問藏。藏云。何不問和尚。僧云。和尚教來問。藏云。我今日頭痛不能爲汝說。問取海兄去。僧問海。海云。我到這裏卻不會。僧舉似大師。大師云。藏頭白海頭黒。

【訓読】 挙す。僧 馬大師に問う。四句を離れ百非を絶す。請う師 某甲に西來意を直指せよ。大師云く、我今日勞倦す。汝が爲に説くこと能はず。智藏に問取し去れ。僧 藏に問う。藏云く、何ぞ和尚に問わざるや。僧云く、和尚教え來りて問はしむ。藏云く、我今日頭痛す汝が爲に説くこと能はず。海兄に問取し去れ。僧 海に問う。海云く、我這裏に到つて不會。僧 大師に挙似す。大師云く、藏頭は白く海頭は黒し。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。ある僧が馬祖道一に尋ねました。「四句を離れ、百非を断ち切つた上で、達磨大師が西天から渡來した意味を直裁に教えてください」と。すると馬祖は「今日は疲れているからあなたに教えることができません。智藏に聞きなさい」と言いました。僧は智藏に尋ねました。智藏は「なぜ馬祖和尚に尋ねないのでですか」と言いました。

【釈意】

達磨大師の西來意（本来の自己）という仏教の真意は、知識や言葉のみによる理解では得られない。馬祖は疲れた時に疲れたと言ひ、とらわれなく自己を現した姿を弟子に示している。そこには仏教の理念や言葉による分別などは含まれていないのである。師という体面にとらわれない馬祖の言葉を聞いても弟子はそれに気付かず、兄弟子たちに同じ質問をして回っている。智藏は馬祖の意を汲み取り、師と同じ方法で修行僧に対応した。

「その和尚に言われてここに来て尋ねているので」と僧が言いました。「今日は頭が痛いのであなたに説くことができません。百丈懐海に聞きに行きなさい」僧は懐海に尋ねました。懐海は「衲もそれについてはわかりません」と答えました。僧は馬祖にこのことを報告しました。馬祖は「智蔵の頭は白く、懐海の頭は黒いな」と言いました。

懐海は言葉を用いず、本来の自己を会得するように促した。馬祖の言葉は、智蔵には智蔵の、懐海には懐海の悟りがあると述べているのである。それを、年長者の智蔵の頭が白髪混じりであることと、若い懐海の頭が黒い様子が自然でありのままであると述べた。また、その言葉は、それぞれのやり方で禅僧としてのはたらしを發揮した両者を評価しているのである。白と黒の言葉を善悪、優劣の区別ととらえてはならない。

【頌】 頌曰。薬之作病。鑿乎前聖。病之作醫。必也其誰。白頭黒頭兮克家之子。有句無句兮截流之機。堂堂坐斷舌頭路。應笑毘耶老古錘。

【訓読】 頌に曰く。薬の病と作る。前聖に鑑よ。病の医と作る。必や其れ誰そ。白頭黒頭克家の子。有句無句截流の機。堂堂として坐断す舌頭の路。応に笑うべし毘耶の老古錘。

【和訳】 天童覚和尚が頌にいました。薬がかえって病になることがあります。先人達をよく見て手本としてみなさい。病を治す医者になる者がいます。そうであるろうとするのは誰でしょうか。智蔵と懐海は家門を興す人物です。そのことばには分別判断を断ち切る

【釈意】 釈尊が悟りを得たことは、その後、多くの人々の救いとなり、仏道修行者にとっての理想となった。しかし、それと同時に悟りを得たいという執着を生み出す結果ともなったのである。前聖とは仏陀を指しており、医者が病気を治すように人々の心の病を治す方法を示した。しかし、悟りへの執着を消し去るのは自身以外に

働きのあります。その威風は堂々としていて分別を断ち切るのに造作ありません。維摩居士が沈黙で返したという手段は使い古した錐のようなもので役に立たず、お笑いぐさです。

はない。白髪頭の智蔵と黒髪の懐海は師の教えをよくわかっており、言葉による肯定と否定のどちらにも陥ることなく、鋭い切れ味で迷いを斬り伏せている。仏教の真意とは何かという文殊菩薩の問いに対して沈黙を通したという維摩は、言葉を離れることにこだわり過ぎ、他に教えるという観点が欠けている。この公案に登場する三人はそこから一步踏み出し、言葉を自由に用いて、なお分別に陥らない境地にいるのである。

〔語彙〕

【馬大師】馬祖道一(709〜788)南岳懷讓の法嗣。「平常心是道」といった經典に依らない禅風で多様な弟子を輩出した。【四句】有・無、有または無・有に問わず無に問わず、の四種の判断による論議方法。【百非】種々の否定【智蔵】西堂智蔵(735〜814)。馬祖の法嗣。百丈懷海と南泉普願と合わせて馬祖下の三大士と称された。【海兄】百丈懷海(749〜814)。馬祖の法嗣。大雄山大智寿聖禅寺に住し、『百丈清規』を記した。【拳似】言葉で提示すること。似は向・与と同じ意味の助詞。【克家之子】よく父の業を継ぐ子。師の教えを守る弟子。【有句無句】四句の内の二つの立場。有句は言語による肯定の立場、無句は空などの否定の立場。【舌頭路】言葉の表面。頭は接尾詞。【毘耶老古錐】毘耶は毘耶離城のこと。老古錐は老熟した師家。維摩居士を指す。

第七則 藥山陸座

【本則】 擧。藥山久不陸座。院主白云。大衆久思示誨。請和尚爲衆說法。山令打鐘。衆方集。山陸座良久便下座歸方丈。主隨後問。和尚適來許爲衆說法。云何不垂一言。山云。經有經師。論有論師。爭怪得老僧。

〔訓誥〕

挙す。葉山久しく陞座せず。院主白して云く、大衆久しく示誨を思う。請う和尚衆が為に説法せんことを。山鐘を打たしむ。衆方集まる。山陞座し良久するに便ち下座して方丈に帰る。主後に随て問う。和尚適來衆の為に説法するを許す。云何ぞ一言を垂らさざる。山云く、經に經師有り、論に論師有り。争でか老僧を怪しむ得んや。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。葉山惟儼は長い間、説法をおこないませんでした。そこで院主が願い出て言いました。修行僧たちはここ暫く説法を拝聴していません。どうか彼らのために教えを説いてください、と。葉山は説法開始の鐘を打たせ、修行僧たちを集めました。葉山は上堂して法座に就き、しばらくすると座を下りて部屋に帰ってしまいました。院主が後からついて行って尋ねました。和尚様は先ほど説法をすることを承諾されたのに、なぜ一言も説かれなかったのですか、と。葉山は「經には經を説く専門家があり、論には論を説く専門家があります。どうして衲におかしな所がありますか」と言いました。

宏智禪師頌古百則の研究(二)(佐藤)

〔釈意〕

第一則「世尊陞座」に通じる公案である。葉山は言葉が発することなくただ法座に坐るだけで、本来の自己とは、今ここにすべてが現れていることを説示した。一方、院主はことばによる教えを重んじ、ことばに執着しているため、説法を行わない葉山の意図を汲むことができなかった。

これに対して葉山は、それぞれに専門があるとして、經師や論師を引き合いに出している。禪僧にとつての修行の本分は専一なる坐禪であり、經典の文字を学び、学習を重ねることではないと説いた。

葉山は、絶えざる修行の積み重ねが重要であり、經典の表面的な理解のみで仏法を知り得たと満足してしまわないよう、注意を喚起しているのである。

【頌】 頌曰。癡兒刻意止啼錢。良駟追風顧影鞭。雲掃長空巢月鶴。寒清入骨不成眠。

【訓読】 頌に曰く。癡兒意を刻む止啼錢。良駟追風影鞭を顧みる。雲長空を掃うに月に巢くう鶴。寒清骨に入つて眠を成さず。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。黄色の葉をお金の代わりに泣く子供に渡し、泣き止ませようとするような苦心を葉山はしています。名馬は鞭を打たれる前に、鞭の影をみて速度を上げます。空高くにあつた雲も消え去り、月に巢を作っている鶴の姿が見えてきます。骨の髄まで寒さが染みわたり、眠気を起こすことがあります。

【釈意】

こどもを泣き止ませるために木の葉をお金にみたてて与えたという故事のように、様々な方便を講じる葉山の様子をうたっている。それは、鞭の影を見ただけで速度を上げる馬のように飲み込みの早い者もいれば、懇切丁寧に導かなければならない院主のような者もいるからである。また修行の初期には方便による理解を促し、次の段階で自発的に仏教の大意とは何かを考え、自ら行動するように導くことも受け取れる。そうすることで雲が晴れるように迷いが消えて悟りを成就することができるのである。月に巢を構える鶴とは、葉山が悟りの境地に在ることを示している。葉山の説法の真意を受け取ることができれば、冷え切った体では眠気が起こらないように、迷いの生じる隙がないのである。

【語彙】

【葉山】 葉山惟儼（745〜828）石頭希遷の法嗣。經論に広く通じ、戒律を厳守したという。【陞座】 請により師家が説法で高座に上ること。【院主】 寺院の一切の事務を執り仕切る僧。監院、監寺。【示誨】 垂示教誨、教えのこと。【良久】 しばらくの間。

【適来】 いましがた、先ほど。【経師】 経を誦する法師。禅宗では經典の字面で意味を理解する者を指す。【論師】 論議を學び、精通している者。仏教を文字でのみ理解し実践を伴わない者。【癡児】 煩惱にとらわれた人、ものの道理に明らかでないこと。【刻意】 苦心する。【止啼錢】 方便説法のこと。子を泣き止ませるため、黄色の葉を金として与えると泣き止むことから、衆生の煩惱を取り去るために様々な方法をとること。【良駒追風】 駒は四頭立ての馬。追風は秦の始皇帝の所有した名馬から。

第八則 百丈野狐

【本則】 擧。百丈上堂。常有一老人聽法隨衆散去。一日不去。丈乃問。立者何人。老人云。某甲於過去迦葉佛時曾住此山。有學人問。大修行底人。還落因果也無。對他道。不落因果。墮野狐身五百生。今請和尚。代一轉語。丈云。不昧因果。老人於言下大悟。

【訓読】 擧す。百丈上堂す。常に一老人有つて法を聴き衆に隨て散じ去る。一日去らず。丈乃ち問う、立つ者は何人ぞ。老人云く、某甲過去迦葉仏の時に曾て此の山に住す。学人有つて問う。大修行底の人、還つて因果に落ちるやと。他に対えて道く。不落因果と。野狐身に墮すこと五百生。今和尚に請う。一転語を代せ。丈云く、不昧因果と。老人言下に於いて大悟す。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。百丈懷海が法堂にて説法する時、僧たちと一緒に聴いて帰っていく一人の老人

【釈意】

老人のいう不落因果では、因果の道理に従っていない。すべてに原因があり、結果が生じる。この関係を否定しては、縁起の理法

がいました。ある日、老人は帰ろうとせず、百丈が尋ねました。「そこにいるあなたは誰ですか」と。

老人が言いました。「私は迦葉仏の時代にこの山で住持をしていました。その時、ある修行僧が修行の完成した人でも、因果に落ちることはあるのです。うかと問いましたので、衲は因果に落ちないと答えました。すると、狐に五百回も生まれ変わることになってしまいました。和尚様、今、私を（輪廻から）解き放つ一言をお願いします」と。百丈が言いました。「因果に迷わないことです」と。老人はこの言葉によって、悟りを得て狐身を脱することができました。

も現実世界も成立しない。

存在の原理としての因果という仏教の根本理念を否定したために、老人は狐に生まれ変わり続けるという連関に閉じ込められてしまった。仏法の真随を見極めたものは、因果の法則にとらわれ迷うことはない。不昧因果とは、その真理に従ってありのままを受け入れることである。因果を受け入れて、しかも因果にとらわれ迷わないことといえる。この言葉を聞くことによって老人は因果の真実を会得し、迷妄の因果を脱することができたのである。

【頌】 頌曰。一尺水。一丈波。不五百生前奈何。不落不昧商量也。依前撞入葛藤窠。阿呵呵。会也麼。若是儻灑灑落落。不妨我哆哆和和。神歌社舞自成曲。拍手其間唱哩囉。

【訓読】 頌に曰く。一尺の水、一丈の波、五百生前奈何ともせず。不落不昧を商量し、依前として撞入する葛藤窠。阿呵呵、会すや。若し是れ汝灑灑落落なれば、我が哆哆和和を妨げず。神歌社舞自ら曲を成す。手を拍ちて其の間を唱う。

【和訳】

天童覚和尚が頷にいたしました。一尺の水が一丈の波になることもあります。一度の間違いを改めることができず、五百回も生まれ変わることにいたしました。不落か不昧かと議論しているうちは、依然として蔓が絡まった穴の中でもがくようなものです。アハハ、わかりますか。もし、留まることなく流れる水のように、心の中のこだわりを無くせば、赤子のような柄の言葉にならない言葉に惑わされることはありません。神社の祭りの歌や踊りは自然に音楽となりました。人々は手拍子で合いの手を入れます。

【語彙】

【過去迦葉仏】 釈尊以前の過去七仏の第六。【不落因果】 因果の法則から離れ、関わらないこと。【一転語】 進退窮まった所で真の自由に転換させる一句。【不昧因果】 因果を認めつつ、それを軽んじないこと。【灑灑落落】 さらさらと流れ落ちる様。

【哆哆和和】 幼児の語を表す。言葉の体を成していないことをいう。【哩囉】 音律に合わない口拍子。

第九則 南泉斬猫

【本則】 擧。南泉一日。東西兩堂爭猫兒。南泉見遂提起云。道得卽不斬。衆無對。泉斬却猫兒為兩段。泉復擧前話問趙州。州便脫草鞋。於頭上戴出。泉云。子若在。恰救得猫兒。

宏智禪師頌古百則の研究（二）（佐藤）

【釈意】

不落因果という一言の波が、五百生という大きな災いを引き起こした。不落因果という立場は、落ちる落ちないという分別につながる。そのような境地では、老人が狐の身から抜け出られなかったように、分別という葛に絡めとられてしまうのである。「因果に味まない」とは因果もあるがままに見て、とらわれないことである。この意味がわかる者は、ここでの説明は赤子の言葉の様に、意味のないものと感じるだろうと宏智は言う。村祭りの歌や舞りに合わせて、習わずとも自然と合いの手を打ってしまうように、あえて思慮分別を止めるということもなく、今をありのままを受け入れることが、不昧因果といえる。

〔訓読〕 挙す。南泉一日、東西両堂猫児を争う。南泉見るに遂に提起して云く。道ひ得れば即ち斬らず。衆対ふる無し。泉 猫児を斬却して両段と為す。泉 復た前話を挙して趙州に問う。州便ち草鞋を脱ぎて頭上に戴きて出づ。泉云く。子若し在らば、恰も猫児の救するを得ん。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。南泉普願はある日、山内の僧たちが一匹の猫を巡り言い争っている光景を見ました。

南泉は直ちにその猫をつまみ上げて言いました。「お前たち、何とか言ってみなさい。うまく言えたらこの猫は救われるが、言えなければ斬り捨てられるだろう」と。しかし誰も何も言うことが出来ませんでした。南泉は仕方なく猫を真つ二つに斬り捨ててしまいました。弟子の趙州が外出から戻りました。南泉は趙州に猫の一件を話しました。聞き終わると趙州は、履いていた草履を脱いで自分の頭に載せると部屋を出ていってしまいました。その姿を見て、南泉は、ああ、お前がああ場においてくれたら、あの猫を救ってやることのできたのに、と言いました。

〔釈意〕

修行僧たちが何を議論していたかは不明だが、推察するなら猫に仏性があるか否かと論じていたのである。南泉は理論でのみ考える僧たちの分別を暴き出し、鮮やかに断ち切ってみせた。寺院内で命を奪うことは考え難いため、猫を斬った素振りをし、その行為で僧たちに対する否定の意味を込めたのであろう。その後、南泉は外出から戻った趙州を試している。趙州は、本来は足に履く草履を頭に乗せることで、分別にとられないかという分別智をもってを示した。この行動は、仏性を有るか無いかという分別智で考える僧たちへの批判である。仏性とは天地に満ちている存在の本源とも言え、千差万別の様相であられるが、有無や優劣で計ることはできない。趙州のみがこれをわかっていたため、南泉は評価したのである。猫を救うとは、門下の修行者の接化を指したものであろう。

【頌】

頌曰。兩堂雲水尽紛拏。王老師能驗正邪。利刀斬斷俱亡像。千古令人愛作家。此道未喪。知音可嘉。鑿山透海兮唯尊大禹。鍊石補天兮獨賢女媧。趙州老有生涯。草鞋頭戴較些些異中來也還明鑿。只箇眞金不混沙。

【訓読】

頌に曰く、兩堂の雲水尽く紛拏す。王老師能く正邪を驗す。利刀斬斷して俱に像を亡す。千古、人をして作家を愛せしむ。此の道未だ喪びず。知音嘉すべし。山を鑿つて海を透すこと、唯り大禹を尊とす。石を練つて天を補うこと、独り女媧を賢とす。趙州老、生涯有り。草鞋頭に戴いて些些に較かなり。異中来や、還つて明鑑。只だ箇の眞金、沙に混ぜず。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。山内の僧が東西に分かれてあれこれと論じています。王老師（南泉普願）が正誤を調べてみました。切れ味の良いい刀はどちらの像も切つて無くしてしまいます。昔から優れた禪者は人々に敬愛されています。禪の修行の道は未だに滅びていません。心の通う友人がいるのは喜ぶべきことです。古代の禹は山を切り開いて黄河を海に通しました。女媧は天柱が砕けたとき五色の石を練つて補つたといわれます。趙州の人生は禪に徹底していました。草鞋を頭に載せるなど、少しは分かっていたようです。外からやつて来たのか

【釈意】

仏性を鋭い刀で両断しても、どちらも仏性であるから二つになることはない。南泉は有無の分別を断ち切つて跡形も無く消し去つたのである。また、修行僧たちの煩惱を斬つて捨てた南泉と、それを理解した趙州との関係を気おけない友人に例えている。さらに大河を海まで通したという禹王に鮮やかに煩惱を切り捨てた南泉をなぞらえ、天を補修した女媧王と南泉の問いに答えを見出し、猫を生かす可能性のあつた趙州の姿を重ね合わせている。趙州を少しはわかつていた人物と表現する言葉（些些）の裏には賞賛の意味がある。外からやつてきた者は全く違つた視点から行動することができると、違いが際立つのである。ここでは趙州とその他の僧との境地の違いを指している。

えって鏡に映すようによく見えます。真金は砂の中にあっても混ざることなく輝くものなのです。

【語彙】

【提起】猫を引っ下げること。【趙州】趙州從諗（778～897）。南泉普願の法嗣。趙州の観音院に住した。【王老師】南泉普願（748～835）のこと。俗姓王氏のためにこう呼ばれた。【作家】唐宋の詩文に優れる作家をいう。転じて禅機の優れた者。【知音】『列子』の故事より。心の底まで理解できる友人。【大禹】『史記』夏本記の禹が黄河の氾濫をよく治めたという故事から。【女媧】『列子』湯問篇にある、戦で折れた天柱を女媧氏が石を練って補修したという故事から。

第十則 台山婆子

【本則】擧。臺山路上有一婆子。凡有僧問台山路向什麼處去。婆云。驀直去。僧纔行。婆云。好箇阿師又恁麼去也。僧拳似趙州。州云。待與勘過。州亦如問。至來日上堂云。我爲汝勘破婆子了也。

【訓詁】擧す。台山路上に一婆子有り。凡そ僧有りて台山の路什麼の処に向つて去るやと問う。婆云く。驀直去と。僧纔に行く。婆云く。好箇の阿師又た恁麼に去くと。僧 趙州に拳似す。州云く。待て与に勘過せん。州亦た前の如く問う。来日に至つて上堂して云く。我汝が為に婆子を勘破し了れり。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。五台山への道に一人の老婆がいました。そこを通るほとんどの僧が聞きましました。「五台山へ向かうにはどの道を行けば良いです

【釈意】

五台山は文殊菩薩を祀る道場である。文殊菩薩とは衆生を悟りに導く菩薩であり、五台山への道とは「悟りへの道」と同義に取ることができるとして、僧の問いは「悟りを得るための道は

か」と。すると老婆が言いました。「まっすぐに行きなさい」。僧が少し行くと、老婆が言いました。

「お人好しのお坊様がまたあのように行きなさい」と。僧は趙州にこの事を話しました。趙州が言いました。「待っていなさい、衲が見てきましたよ」。趙州は先の僧のように老婆に尋ねました。翌日、趙州が法堂に上がって説法する際に言いました。「あなたの為に老婆を見破ってきました」と。

【頌】 頌曰。年老成精不謬傳。趙州古仏嗣南泉。直錢。

【訓読】 頌に曰く、年老いて精と成るを謬って伝えず、趙州古仏南泉に嗣ぐ。枯龜命を喪うこと凶象に因る、良駟追風も纏牽に累さる。勘破し了る老婆の禪。人前に説向すれば錢に直らず。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。年老いて化け物になるというのは本当だったようです。長寿であった趙州は南泉普願の法を嗣いでいます。龜が命を奪われるのは甲羅に吉凶を占う模様が現れるからです。名

何処か」と聞く意味が暗に込められている。禪の境地に徹している僧ならば老婆の言葉に惑わされることはないが、未熟な者は余計な考えにとられるのである。

しかし、この僧は、趙州が何を見破ったのかを考えて、また迷うであろう。趙州の狙いはそこにあり、自ら知ろうとする努力の積み重ねに導いたのである。教えられれば知解に留まるが、自ら会得すれば真に自己のものとなる。

枯龜喪命因圖象。良駟追風累纏牽。勘破了老婆禪。説向人前不

【釈意】

百二十歳まで生きたとされる趙州の老練な手腕を表している。龜は占いに用いる甲羅を持っているが為に命を落とすと言われる。生半可な禪についての知識を持っていたために、老婆はする必要のないことをして、趙州に見破られることになった。また、修行

馬も綱につながれて引つ張りまわされます。趙州は老婆の禪を見破りました。趙州が老婆を見破ったことを人前で説いても、お金にはならないのです。

僧でさえ、名馬が手綱を付けられるように老婆のことばに心が縛られてしまった。ここでは趙州がどの様に見破ったかを僧に教えてはいない。それを伝えてしまうことは、趙州の見解をなぞることに終止してしまい、この僧独自の境地にはならないため、趙州は詳細を伝えてはいないのである。「不直錢」とはその意味で使われたことばである。

〔語彙〕

【台山】五台山。五山の一つ。文殊菩薩を祀る霊場といわれる。【慕直去】まっすぐに行けの意。【好箇阿師】お人よしのお坊様。【枯龜喪命】『莊子』「外物篇」の「老龜の背に吉凶禍福を占う凶像が現れていたために殺された」という故事。【良駒追風】駒は四頭立ての馬車。追風は秦の始皇帝が所有していた名馬のこと。【累纏牽】纏は索のこと。手綱によつて自由な行動が奪われる様子。

第十一則 雲門兩病

【本則】擧。雲門大師云。光不透脱有兩般病。一切處不明面前有物。是一透得一切法空。隱隱地似有箇物相似。亦是光不透脱。又法身亦有兩般病。得到法身。爲法執不忘己見猶存。墮在法身邊。是一。直饒透得放過即不可。子細檢點將來。有什麼氣息。亦是病。

〔訓読〕 擧す。雲門大師云く、光透脱せざれば兩般の病有り。一切の所明らかならずして面前に物有り。是一にして一切法空を透得すれども、隱隱地の箇の物有るに似て相い似たり。亦是れ光透脱せざる。又法身亦兩般の病有り。法身に到るを得るも、法執を忘ぜずして己見猶存するが爲に、法身辺に墮在す。是一なり。直饒透得するも放過

せば即ち不可なり。子細に点検し将来せば、什麼の氣息か有らん。亦是れ病なり。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。雲門大師は、次のように説法をしました。無分別心（悟り）を得たとしても、それを超えなければ、二種類の病となります。すべてのものは移り変わると会得しても、目前に存在するものに心を捉われてしまうこと、これが一つ目の病です。人法ともすべてを「空」と会得していても、仏の境界があるかのような分別心を持つならば、真の解脱とはいえません。これが二つ目の病です。

また、清淨法身（仏心）を得ても二つの病となることがあります。悟りに到っても、ここが安住の地と思ひ、そこに留まってしまうのが一つ目の病です。さらに、悟道に到っても、ここを悟りの終着点と考えて、修行を放棄してしまつてはいけません。よく自身の悟りを点検したとしても、悟りとして完全であると安堵してしまえば、本来の働きを失つ

〔釈意〕

雲門文偃が、悟入前と悟入後に対して、それぞれ「両病」と表現し、修行を徹底させるために説法をしている。仏性を得るには、目の前のものに対して、分別心を持たないこと、外に悟りの世界を求めないことが必要である。そして、たとえ仏性を会得しても、悟道した自分の立場に執着し、これで完成したという想いがあるなら、真に本来の在り方を会得したことになる。

悟りの本質が会得できていれば、了悟の後には自ずと悟りの境地を離れて、凡夫の世界へと回帰するのである。本来の自己を了得して、修行を完了したとの錯誤に陥らないことが肝要である。

て、二つ目の病となるのです。

【頌】 頌曰。森羅萬象許崢嶸。透脱無方礙眼睛。掃彼門庭誰有力。隱人胸次自成情。船橫野渡涵秋碧。棹入蘆花

照雪明。串錦老漁懷就市。飄飄一葉浪頭行。

【訓読】 頌に曰く。森羅万象崢嶸に許す。透脱無方なるも眼睛を礙ぐ。彼の門庭を掃くに誰ぞ力有るや。人の胸次に隠れて自ら情を成す。船は野渡の秋に涵されて碧に横たわり、棹は蘆花の雪に照らされて明に入る。串錦の老漁市に就かんことを懐い、飄飄として一葉浪頭を行く。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいいました。自然も人も、そのま
まが真実の姿です。自由自在の悟りを会得しても、
その境地に執着すれば、真実が見えなくなってしまう
います。自身の身心の庭を掃き尽くせるほど力量の
ある人はいるのでしょうか。根源的迷妄は容易には
除くことができず、人の心の奥底に隠れて、いつも
分別の世界へと後戻りさせようとしています。

漁師は船を波止場に繋ぎ、水面に映る青々とした秋
空と秋の景色を楽しんでいます。船を動かす棹も、
雪が積もったかのような白い蘆の花の中に差し込ま

【釈意】

「叢林の庭を掃く」は、どのように自身の煩惱を払拭するかを譬
えている。分別があるから払拭する必要があると思ひ、分別に捉
われてしまう。修行が進み、悟りの世界（彼岸）に達しても、そ
こに映しだされた絶景を眺めてみとれてしまい、到達したところ
に留まってはならない。また、雪と白い蘆の花の見分けがつかない
ような、差別のない自由無碍な境地にいると思つて、己見にお
ぼれてはならない。老漁夫（祖師）が思ひ描くことは、魚を市場
で売ることである。それは、衆生済度の境地である。悟りに何の
未練もこだわりもなく、船を此岸へと向けている。了悟の後、衆
生を導く手段を弄することを譬えている。

れていきます。しかし、魚を釣り上げた老漁夫は、市場で魚を売ることを思い、何のこだわりもなく船を漕ぎ出してゆきます。

【語彙】【雲門大師】雲門文偃（864～949）。嘉興（浙江省）の人。雪峰義存に参じ、その法を嗣ぐ。【隱隱地】表に現われないが、その存在は確かなさま。地は助詞。【放過】そのままにしておく。【什】写本によっては「甚」。

第十二則 地藏種田

【本則】擧。地藏問脩山主。甚處來。修云。南方來。藏云。南方近日佛法如何。修云。商量浩浩地。藏云。爭如我這裡種田博飯喫。修云。爭奈三界何。藏云。爾喚什麼作三界。

【訓読】 挙す。地藏 脩山主に問う。甚処より来るや。脩云く、南方より来たる。藏云く、南方 近日の佛法如何。脩云く、商量浩浩地たり。藏云く、争か我れ這裏に田を種え 飯を博めて喫せんが如し。脩云く、争か三界を奈何せん。藏云く、你 甚麼を喚んでか三界と作すや、と。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。地藏は脩山主に「どこから来ましたか」と質問をしました。脩山主は「南方から来ました」とありにままたに答えました。そこで地藏は「近頃の南方の仏法はどのような状況ですか」

【釈意】

地藏桂琛は、脩山主に「どこから来ましたか」（あなたは本来の自己を会得しましたか）と問うている。それは、仏法とは、真の自己とは何かを、あなた自身の方法で答えなさいと尋ねているのである。地藏の真意が見抜けなかった脩山主は、南から来たと応

と問いました。脩山主は「問答が盛んです」と返事しました。それを聞いて、地藏は「それなら、納がここで米を作り、握り飯を作っていることと変わりはないな」と答えました。脩山主は「では、三界とはどのようなものと考えておみえですか」と問いました。地藏は「あなたの言う三界とはどのようなものですか」と質しました。

え、問答の盛んなさまを報告した。地藏は、どんな弁舌を用いても、知解分別に止まれば仏法の会得には至らず、文字やことばに捉われない日々の修行こそ、真の仏法であると教えた。しかし、脩山主は南方で修行した自負をもって、地藏を「三界」でやり込めんとした。地藏は、この現実世界を措いて別に三界があるのではない。理念としての三界に執着し、理解しようとするならば誤ることになると、米を作りにぎりめしを丸めっていると教えたのである。後、脩山主は地藏の方便によって、この世界こそ真実、という教えに気付き、地藏の法を嗣いだ。

【頌】 頌曰。宗説般般盡強爲。流傳耳口便支離。種田博飯家常事。不是飽參人不知。參飽明知無所求。子房終不

貴封侯。忘機歸去同魚鳥。濯足滄浪煙水秋。

【訓読】 頌に曰く。宗説般般尽く強いて爲す。耳口に流伝すれば便ち支離す。田を種え飯を博む家常の事。是れ飽參の人にあらざれば知らず。參じ飽きて明らかに知る求む所無しと。子房終に封侯を貴ばず。機を忘じ歸り去らば魚鳥に同じし。足を滄浪に濯う煙水の秋。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。南方では、問答が盛んに行われています。しかし、耳で聞いた仏法を、

【釈意】

本則に記される地藏と脩山主の問答は、理念にとらわれて日常を忘れては、真実の在り方を会得することができない、と説いてい

いくら言葉巧みに説いても、間違つた方向へといつてしまします。田に稲を実らせ、米を作り握り飯を作る日常底こそ真実の姿です。了悟の人は、今この日常こそ真実であり、このほかに仏の世界があると虚妄分別にとらわれることはありません。張子房のように、榮譽を捨てて故郷に帰り、自然の中で魚や鳥と同じように生きることこそ、真の生き方といえます。清らかな水では冠の紐を洗い、水が濁れば足を洗うように、時に応じた捉われのない生活こそ理想の生き方なのです。

【語彙】
【地蔵】(867〜928) 地蔵桂琛。常山(浙江省)の人。雲居道膺・雪峰義存・玄沙師備に参じた。玄沙師備の法嗣。地蔵院(閩の西石山)、羅漢院(漳州)に住す。【脩山主】(唐末五代頃)。龍濟紹修とも。桂琛の法を嗣ぐ。【浩浩地】さかんなさま。地は助詞。【博】(＝博)。ここでは「博」(意・まるめる)。「争奈」どうにもならない。【三界】欲界・色界・無色界のこと。【宗説】宗通・説通の略。宗旨の根本を悟り、弁舌をもって説き示す。【子房】漢の高祖の重臣、張良(？〜186)のこと。紀元前二〇三年、劉邦と項羽の戦いで項羽を滅ぼした。褒賞として、諸侯となるようにすすめられるがこれを辞退し、留に封ぜられ、留侯となった。【封侯】地方君主。諸侯に任ぜられる。【滄浪】川の名。『楚辭』漁夫第七の引用。【什】写本によっては「甚」。

ることば(論理)から離れて、日々の修行をひたすら続けることこそが、何物にもとらわれない求道者の生き方である。頌では、迷いを離れ、自由な在り方について、張子房が諸侯となるのを断つたことは、魚が水中を泳ぎ、鳥が大空を羽ばたくように自然と一体になることで、それは理想の境地であるものの、そこに安住しては悟境への執着となってしまうと説く。さらに一步を進めて、自在に生きることが、引いては導くという意識なく人々を接化することにならねばならないと、川の水で足を洗うことを挙げて示している。

第十三則 臨濟瞎驢

【本則】 擧。臨際將示滅。囑三聖云。吾遷化後。不得滅却吾正法眼藏。聖云。爭敢滅却和尚正法眼藏。際云。忽有人問汝。作麼生對。聖便喝。際云。誰知吾正法眼藏。向這瞎驢邊滅却。

【訓読】 擧す。臨際將に滅を示さんとす。三聖に囑して云わく、吾が遷化の後、吾が正法眼藏を滅却することを得ざれ。聖云く、争か敢えて和尚の正法眼藏を滅却せんや。際云く、忽ち人有りて汝に問わば、作麼生か対えん。聖便ち喝す。際云く、誰か知らん吾が正法眼藏、這の瞎驢辺に向かつて滅却せるを。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。臨濟がまさに入滅しようとした時、三聖に後のことを依囑して言いました。「衲の死後、継承した正しい仏法の真髓を、絶やさないように相伝して下さい」と。三聖は言いました。「どのようなことがあっても、絶やすことはいたしません」。臨濟は「もし誰かが、あなたに仏法の心髓を尋ねたら、どのように答えますか」と問いました。三聖は「喝」と声を発しました。臨濟は「二体誰が知っていたであろう。衲の仏法は、役に

【釈意】

臨濟義玄が入滅しようとした時の、臨濟と三聖慧然の問答である。仏仏祖祖、法は師から弟子へと相伝している。仏法の真髓は、言葉や文字で説明できるものではない。また、師のはたらきが、そのまま、弟子に伝えられるものでもない。三聖の一喝は、臨濟の教えを継承したことを指し、臨濟は、三聖を罵ることで、殺活自在のはたらきを認めている。仏、祖師は尊ぶべき存在であるという既成概念を退けるために、後継者である三聖を瞎驢と呼び、特別な継承すべき何かが存在するかのような誤りを避けるために、滅却といっている。弟子への伝法を、叱責の言葉や悪口・

立たない驢馬のようなおろかな弟子によつて断絶してしまつたことを」と嘆きました。

罵倒の言葉で表現するのはこのような理由による。師の仏法の心髄は、まさしく余すところなく弟子へと継承されるが、その現し方は師と同一ではなく、弟子の個性が表れていなければならぬ。形までも真似ることは、師の跡をなぞるだけのまやかしだからである。師と並び立つには、臨済には臨済の、三聖には三聖の、修行により導き出された表現があり、それを家風とも称するのである。

【頌】

頌曰。信衣半夜付盧能。攪攪黃梅七百僧。臨際一枝正法眼。瞎驢滅却得人憎。心心相印祖祖傳燈。夷平海岳變化鯤鵬。只箇名言難比擬。大都手段解翻騰。

【訓読】

頌に曰く。信衣半夜に盧能に付す。攪攪たる黃梅七百の僧。臨際一枝の正法眼、瞎驢滅却して人の憎しみを得たり。心心相印し祖祖の燈を伝う。海岳を夷平し 鵬鵬を変化す。只箇の名言 比擬すること難し。大都手段は翻騰なることを解すべし。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。五祖弘忍から六祖慧能へと、深夜の三更（午前〇～二時）に仏法が伝えられ、東禅寺の修行僧七百人は騒然となりました。臨済が法を伝えた時も、おろかな弟子が、臨済の教

【釈意】
六祖慧能が五祖弘忍の法を嗣いだ時も、三聖が臨済の法を嗣いだ時も、法灯が正しく受け継がれたことは明らかである。海や山を平らにするという譬えは、弟子が大機大用の人となり、ことばで表現できない程の力量を備えている喩えである。

えを潰したと、人の憎しみをかいました。師の心と弟子の心が一体となって、仏祖の教えが伝えられてきたのです。弟子は達悟により、深い海、高い山を平にするような力量を具えた優れた祖師となって闊達自在に羽ばたきます。この「喝」はどのようなことばをもってしても言い尽くせるものではありません。接化の方法は、祖師それぞれに自由自在なのです。

【語彙】【臨際】臨濟義玄(？～867)のこと。曹州(山東省)南華の人。黄檗希運の法嗣。『統藏経』では「臨際」とある。【三聖】三聖慧然(唐代の人)。鎮州(河北省)三聖院に住す。【瞎驢】盲目の驢馬。転じて、おろかなもの。【信衣】伝衣。【盧能】六祖寂した。【黄梅七百僧】五祖弘忍の開法説法をした東禪寺。この時の首座は神秀。【鷓鴣】北海に住むという大きな魚と南海に向かつてはばたくおおとりのこと。非常に大きな事業や大人物のたとえ。『莊子』逍遙遊篇からの引用。【名言】名相言句(＝形と言葉)。

第十四則 廓侍過茶

【本則】 擧。廓侍者問徳山。從上諸聖向什麼處去也。山云。作麼作麼。廓云。勅点飛龍馬。跛鼈出頭來。山便休去。來日山浴出。廓過茶與山。山撫廓背一下。廓云。這老漢方始瞥地。山又休去。

〔訓読〕 挙す。廓侍者 徳山に問う。従上の諸聖什麼の処に向かいて去るや。山云く、作麼作麼。廓云く、飛龍馬を勅点すれば、跛鼈出頭し来る。山便ち休し去る。来日山浴より出ず。廓 茶をわたし入れて山に与う。山廓が背を撫すること一下す。廓云く、這の老漢方に始めて瞥地。山又休し去る。

〔和訳〕

諸君、よく聴きなさい。廓侍者が徳山宣鑑に「輪廻の世界から脱した歴代の仏祖父は一体どこへ行つたのでしょうか」と問いました。徳山は「何。何。」と聞こえないふりして廓侍者の意図を見抜いて、はぐらかしました。廓侍者は「皇帝の駿馬を用意するように命じたのに、なんと期待に反してとんでもない鈍馬が出て来てしまった」と呟きました。徳山は廓侍者のことばを聞いても何も言いませんでした。翌日、徳山が入浴を終えたところへ、廓侍者がいつもと変わらぬ様子で、茶をいれて手渡しました。すると徳山は黙って廓侍者の背中をひとなでしました。廓侍者は「この老僧も少しは衲の境界をつかめたようだ」と再び呟きました。しかし、徳山はこの時も何もいみませんでした。

宏智禪師頌古百則の研究(二)(佐藤)

〔釈意〕

廓侍者は、仏の世界はどこにもいかないこと、仏とは自身であることを解つていて質問したので、徳山は「何、何」と聞こえないふりをした。廓侍者は駿馬と鈍馬を出して、徳山の対応を挑発したが、徳山は弟子にけなされても黙って行ってしまったのである。廓侍者は、自らの境地を徳山に評価させようとしたのであるが、もくろみが外れて、境地を見透かされたばかりか、軽くないなされたのである。次に、廓侍者は、風呂から出てきた徳山に、侍者の役目であるお茶を出したところ、「仏はここおられるか」と背中をひとなでされた。徳山は、日常を離れて仏法の真理はないことを示した。そこで廓侍者は「衲の境地を少しはわかったらしい」というのであるが、徳山は今度も何も言わずにその場を去つたのである。師としての立場にこだわらず、黙して去つたのは、廓侍者に自己顕示をぬぐい去れない未熟さを教えるためであったが、この時、廓侍者はそのことが理解できたであろうか。

【頌】 頌曰。觀面來時作者知。可中石火電光遲。輸機謀主有深意。欺敵兵家無遠思。發必中。更謾誰。腦後見腮兮人難觸犯。眉低著眼兮渠得便宜。

【訓読】 頌に曰く。觀面に來る時 作者知る。このうち石火電光遅し。機をつくす謀主に深意有り。敵を欺く兵家に遠思無し。發すれば必ずあたる。更に誰をか謾せんや。腦後に腮を見て 人觸犯し難し。眉低に眼を著けて渠れ便宜を得たり。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいいました。修行者が眼の前に突然來た時に、指導者の力量が判るものです。徳山の対応は電光石火よりも早いものでした。弟子に負けたりをしているところに徳山の深い意図があり、敵をあなどって挑む廓侍者には深慮遠謀などないのです。徳山は、弓の名人のように、百発百中で相手を見抜き、外れることがないので、誰も欺くことができません。別格の人を相手にする時は用心をしなればいけません。廓侍者も、それまでの修行の成果で、一応の見識が備わっていましたから、徳山の親切な指導を受けることができたのです。

【釈意】

徳山の変幻自在の接化が記されている。徳山の棒と称された荒々しさはここにはない。境地が熟して、棒を下すのみの時代とは異なるのである。円熟した徳山に挑む廓侍者は、いなされ、身を躲されて、何もさせてもらえないでいる。しかし、そのことが侍者自身は理解できていないのである。「あざと」が後から見えるとは、特別な人、化け物の意味で、徳山を指す。「眉低に眼を著け」ているのは普通の人の意味で廓侍者を言う。背中を撫でられた廓侍者は、強がってみたものの、背筋が凍り付いたことであろう。

【語彙】

【廓侍者】守廓侍者、伝不詳。侍者は師長に常侍して補佐する役。【徳山】徳山宣鑑（782〜865）諡号は見性大師。俗姓は周氏。劍南の人。龍潭崇信の法嗣。朗州（湖南省）の徳山に住す。奔放豪放な禅風をもつて知られ、「徳山の棒、臨済の喝」と並称された。【飛龍馬を勅点す……】飛龍馬は駿馬。跛鱉は鈍馬のこと。勅点は天子の勅命によつて点呼する意。駿馬を求めたら、思いもよらぬ鈍馬がきたという意。【輪】負ける。

第十五則 仰山挿鋏

【本則】擧。滄山問仰山。甚處來。仰云。田中來。山云。田中多少人。仰挿下鋏子。叉手而立。山云。南山大有人刈茆。仰拈鋏子便行。

【訓読】擧す。滄山 仰山に問う。甚の処より来るや。仰云く、田中より来る。山云く、田中多少の人ぞ。仰 鋏子を挿下し 叉手して立つ。山云く、南山に大に人有つて茆を刈る。仰 鋏子を拈じて 便ち行く。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。滄山靈祐は仰山慧寂が帰ってきたのを見て、「どこへ行つて来たのか」と問いました。仰山は「水田での仕事を終えて戻つて来ました」と応えました。滄山は「水田には誰かいたのか」と聞きました。仰山は担いできた鋏を地に突き立て、両手を胸の前で組み合わせる動作で滄山に応

【釈意】

滄山は、仰山が鋏を担いで帰ってきたのを見て心境を試した。「どこから帰つて来た」とは現実には則した言葉であるので、仰山は分別を交えることなく、ありのまま「野良仕事からです」と応えている。滄山は更に、「田では何人が働いていたのか」と問い、仏の所在を「更に一句いえ」の問いで迫った。仰山はそこで滄山の意図をくんで、何処においても仏と自己は同一と、威儀を

えました。それを見て瀉山が云いました。「今日、この南山では修行僧が総出で茆を刈っている」と。それを聞いて仰山は、鋏をとって立ち去りました。

正して叉手で応じた。それを見て瀉山は、悟道の人は次に何をすべきかを、「南山では皆が茆を刈っている」と云い、達悟すればそれで終わりではないことを改めて説いた。百尺竿頭上進一步がなければならず、覺地に留まることは悟りへの執着に他ならないと戒めたのである。仰山は、師の戒めを受けるまでもなく、今既に悟後の修を實踐していることを、鋏をかついで出てゆくことで示したのである。

【頌】 頌曰。老覺情多念子孫。而今慚愧起家門。是須記取南山語。鏤骨銘肌共報恩。

【訓読】 頌に曰く、老覺情多くして子孫を念う。而今の慚愧家門を起こす。是れ須らく南山の語を記取すべし。骨に鏤め肌銘じて共に恩を報ぜよ。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。老練の指導者がきめ細やかな配慮で子孫のことを念います。今の自分を真摯に反省することで、師の後を継ぎ、師資で瀉仰宗を起こしました。今の学人も、弟子に託した南山（瀉山）のこぼしつかりと覚えておかなければいけません。我が身に刻みつけて、決して忘れない

【釈意】

瀉山の老婆親切と、仰山の誠実さが、瀉仰宗立宗に結びついた。弟子は師の戒めを心にしるし、報恩行に徹する。達悟しても悟りの地に留まらず、向上門から向下門へ転じて、化道としての修行は終わらないことを、肝に銘じたのである。日常の自己を離れて仏法はないことを仰山は明確に示した。後、瀉山の法系は弟子の仰山と共に五家最初の瀉仰宗と称されるようになる。

ようにしなければなりません。

〔語彙〕

〔瀉山〕瀉山靈祐（771〜853）、百丈懷海の法嗣で瀉仰宗の祖。俗姓は趙氏、福州長溪の人。湖南の大瀉山同慶寺に住すること四十二年、謹嚴綿密な家風をもって道俗を教化した。〔仰山〕仰山慧寂（807〜883）、俗姓は葉氏、韶州の人、瀉山の法を嗣いだ。袁州大仰山に住した。その門流を瀉仰宗という。仰山は円相をもちいたところから、それがこの宗の特異な門風ともなった。

第十六則 麻谷振錫

【本則】擧。麻谷持錫到章敬。遶禪床三匝振錫一下。卓然而立。敬云。是是。谷又到南泉。遶禪床三匝振錫一下。

卓然而立。泉云。不是不是。谷云。章敬道是。和尚爲什麼道不是。泉云。章敬即是。是汝不是。此是風力所転。終成敗壞。

〔訓読〕

擧す。麻谷 錫を持って章敬に到る。禪牀を遶ること三匝して錫を振るうこと一下し、卓然として立つ。敬云く、是是。谷また南泉に到る。禪牀を遶ること三匝して錫を振るうこと一下し、卓然として立つ。泉云く、不是不是。谷云く、章敬は是と道い、和尚は什麼としてか不是と道うや。泉云く、章敬は即ち是。是れ汝は不是。此れは是れ風力の転ずる所なり。終に敗壞を成せり。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。麻谷宝徹が、錫杖を持って章敬懷暉の所へ来ました。そして、章敬が坐している禪床を三回まわり、錫杖を一回振って、面前に立

〔釈意〕

麻谷は錫杖を持って章敬の元にゆき、本則に記される行動を見せた。傍若無人な態度を窘めることなく章敬は「なかなかよろしい」と認めた。章敬が認めたのは策励であり、この後君はどうす

ちました。そこで章敬は「よし」といいました。さらに麻谷は南泉普願のところへ行き、章敬の時と同じように、禅床を三回まわり、錫杖を一回振って、面前に立ちました。すると南泉は「だめだ」と麻谷に告げたのです。麻谷は「章敬和尚は是というのに、何故、和尚は不是と云うのですか」と尋ねました。南泉が言ました。「章敬和尚はいいのだが、ほかならぬ君がだめなのだ。今の君の思いは心の中に吹く分別の風が起こす執着であり、最後には壊してしまうべきものなのだ」と。

る、と問ったのである。悟境を認められたと有頂天になった麻谷は、思い上がったまま今度は南泉のところへ行って同じことをした。全く同じ作法なのに南泉は「全く認められない」と、麻谷の境界を退けた。そこで麻谷は不満を南泉に告げたことで、馬脚を現してしまった。南泉は、ほめられては喜び、貶されては不満を抱くようでは了悟にほど遠いと諫めたのである。麻谷は章敬に認められて、その境地を南泉のもとで再確認しようとしている。自身に不安の思いがあったのであれば、修行の成果がそこにある。南泉は章敬の意図を見抜きつつ、麻谷を器量の人と見込んで親切を施している。

【頌】 頌曰。是與不是。好看椀檟。似抑似揚。難兄難弟。縦也彼既臨時。奪也我何特地。金錫一振太孤標。繩床三遶閑游戲。叢林擾擾是非生。想像髑髏前見鬼。

【訓読】 頌に曰く。是と不是と、好く椀檟を看よ。抑するに似たり、揚するに似たり、兄たり難く弟たり難し。縦や彼れ既に時に臨む。奪や我れ何ぞ特地ならん。金錫一たび振いて太だ孤標。繩床三たび遶りて閑りに遊戲す。叢林擾擾として是非生ず。想いやる髑髏前に鬼を見ることを。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。章敬の是と南泉の不

〔釈意〕 章敬の是も南泉の不是も方便である。認められて喜び、退けられ

是と、どちらも麻谷を試す陥穽なのです。不是と告げての策励も是と告げての策励も、どちらの接化が優れているとはいえないほど拮抗しています。麻谷の境地を許すというのもその時の方便であり、許さないというのも方便であり特別なことではありません。真の自己を見いだすための錫杖を振るい、章敬と南泉の周りを巡ったのも麻谷自身の内にある仏心に動かされたことでした。この後、修行道場ではこの問答の是と不是を巡って論議が起りました。が、それはまるで、鬻體を見て鬼を想像してしまうような愚かなことでした。

て不満を漏らす麻谷は未だ自己に徹底していなかった。しかし、章敬に認められて、尚、南泉の元を訪れたのは、自分に自信が持てなかったからであろう。このことで麻谷は真摯に修行を積み重ねてきたことがわかる。幸いなことに、南泉の卓越した指導を受けて分別を抜けることができた。宏智は、この問答について論議する修行僧を、是と不是という幻に振り回されて、真実を見ることができない愚かな者達と断じている。

【語彙】麻谷宝徹（不詳）、馬祖道一の法嗣で、蒲州麻谷山に住した。【章敬】章敬懷暉（754〜815）、俗姓は謝氏、泉州同安の人。馬祖道一に参じ、開悟のち齊州の雲巖山章敬寺の毘婆舍那院等に住した。大覚禪師、追諡を大宣教禪師という。【禪牀】を遶ること三匝】禪牀とは坐禅をする牀。遶ること三匝は仏教におけるインド以来の礼法で、禪牀を三たびまわること。【南泉】南泉普願（748〜834）、馬祖道一禪師の法嗣。【四大】個人および万有を構成する四の元素。地・水・火・風。【風力所転】『維摩經』方便品に「是の身は無作、風力（仏の力）の所転なり」（私というものに何らかの力が加わるものでない）とある。【捲】捲は木をまげて作った盆。續にも作る。捲は一説に圈套といい、畏のこと。【兄たり難く弟たり難し】東漢の陳元方の子の長文と秀方の子の孝光の二人が、それぞれ父の功績の優劣を論じて決着がつかないので、祖父の太丘に判定を求めた。すると太丘が元方は兄たり難く、秀方は弟たり難しと云った。二人は兄弟であるが優劣がないという意。南泉と章敬をさす。【特地】地は助字、特は特別で「わざと」と訓む。故意ということ。【孤標】卓然として独立した様子を形容した詞。【繩牀】繩を

組んで作つ椅子で、その上に敷物を敷いて坐禪する一種の椅子。【叢林】僧が一処和合して修得すること樹林のごとし、といふところから、修行の道場のこと。【髑髏前に鬼を見ることを】事実がないのにないものを見てしまう。

第十七則 法眼毫釐

【本則】 擧。法眼問脩山主。毫釐有差。天地懸隔。汝作麼生會。脩云。毫釐有差。天地懸隔。眼云。恁麼又爭得。脩云。某甲只如此。和尚又如何。眼云。毫釐有差。天地懸隔。脩便禮拜。

【訓読】 擧す。法眼 脩山主に問う。毫釐も差有れば、天地懸かに隔たる。汝作麼生か會す。脩云く、毫釐も差有れば、天地懸かに隔たる。眼云く、恁麼なれば又争か得ん。脩云く、某甲 只だ此の如し、和尚又如何。眼云く、毫釐も差有れば天地懸かに隔たる。脩 便ち禮拜す。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。法眼文益が脩山主に、「わずかな違いがあれば、天と地ほどに隔たるといふ意味を、あなたはどのように会得していますか」と質問をしました。脩山主は、「わずかな違いがあれば、天と地ほどに隔たるのです」と答えました。法眼は、「そのように会得しただけで、どうして（悟りを）得ることができるでしょう」といいました。

〔釈意〕

法眼文益が脩山主に、『信心銘』から引用して「毫釐有差天地懸隔」の理解について質問をしている。脩山主は、「わずかな違いがあれば、天と地ほどに隔たると文字通りに答えた。それを聞いて法眼は、ただそのように会得しただけで、どうして悟りを得ることができるのか、といって脩山主にさらなる一句を求めた。境地を確認するためのことばである。脩山主は惑わされることなく、では和尚様はいかがですか、と問うことで、悟境の徹底を表

脩山主は「衲はただそのように会得しただけです。和尚様（法眼）はどうなのですか」と応えました。

法眼は「わずかな違いがあれば、天と地ほどに隔たると答えました。脩山主は問答を終えて礼拝しました。

【頌】 頌曰。秤頭蠅坐便欹傾。萬世權衡照不平。斤兩鎚銖見端的。終歸輸我定盤星。

【訓読】 頌に曰く。秤頭蠅坐すれば便ち欹傾す。万世の権衡不平を照らす。斤兩鎚銖端的を見るも、終に歸して我が定盤星に輸く。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいいました。精巧な秤は、蠅が止まるだけで傾きます。永く均衡のとれた秤のわずかな傾きを明確に照らしました。しかし、ほんの僅かな重さの違いを見つけて、秤の均衡をただしたとしても、秤を秤として成り立たせている起点の存在にはかなわないのです。

した。徳山のことも揺らぐことのない、真の自己の会得が表明されている。それを聞いて徳山は、「毫釐有差天地懸隔」と繰り返して、悟境を証明したのである。最後の礼拝は、徳山の証明に対する脩山主の謝拝である。

【釈意】

均衡がとれた秤は竿が上下しないように、悟境が徹底した仏は、どのような場合も自身に疑念がない。僅かでも心に迷いがあれば、徳山に追い詰められることで、馬脚を現したであろうが、脩山主は一応の見識に達していた。徳山はその徹底をはかったのである。徳山に認められたのではあるが、脩山主は均衡状態にある秤のようなもので、何時崩れるかわからないのである。それに対して徳山は、決して動くことのない秤の起点のような存在である。まだまだ脩山主は徳山にはかなわないのである。

〔語彙〕

【法眼】法眼宗の開祖・法眼文益（885～958）のこと。俗姓は魯氏。余杭（浙江省）の人。羅漢桂琛の法嗣。【脩山主】龍濟紹修。生没年不詳。羅漢桂琛の法嗣。第十二則にも登場。【毫釐有差天地懸隔】三祖鑑智僧璨の『信心銘』による。至道無難。唯嫌揀擇。但莫憎愛。洞然明白。毫釐有差。天地懸隔。【大正藏】48、376b【權衡】權はかりのおもり。衡は秤の竿。【斤兩錙銖】重量の名数。銖は一兩の二四分の一。錙は六銖。斤は一六兩。一兩は二六グラム。【定盤星】天秤の桿の基点にある星の印。物の軽重に関わらない、起点また零点のこと。

第十八則 趙州狗子

【本則】

舉。僧問趙州。狗子還有佛性也無。州云有。僧云。既有。爲什麼却撞入這箇皮袋。州云爲他知而故犯。又有僧問。狗子還有佛性也無。州云無。僧云。一切衆生皆有佛性。狗子爲什麼却無。州云。爲伊有業識在。

〔訓読〕

挙す。僧 趙州に問う。狗子に還つて仏性有りや無しや。州云く、有。僧云く、既に有らば、甚麼と爲してか却つて這箇の皮袋に撞入するや。州云く、他 知つてことさらに犯すが爲なり。又 僧有りて問う、狗子に還つて仏性有りや無しや。州云く、無。僧云く、一切衆生皆有仏性と、狗子什麼としてか却つて無と爲すや。州云く、伊に業識の有り在るが爲なり。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。僧が趙州從諗に、「はたして犬にも仏性があるのでしょうか」と質問をしました。趙州は「ある」と答えました。僧は「犬に仏性

〔釈意〕

二人の僧が、趙州從諗に対して「狗子還有佛性也無」と、同じ質問をしている。僧の問いに、趙州は、それぞれ逆の答えを返している。二人の僧は、「有無」にとらわれているため、そこから抜

が既に具わっているのなら、どうしてそのような姿でいるのでしょうか」と質問をしました。趙州は「犬は仏性があることを知っていて、わざとそうしているのです」と答えました。またある時、別の僧が「はたして犬にも仏性があるのでしょうか」と質問をしました。趙州は「ない」と答えました。僧は「すべての衆生に仏性があると仏法は説くのに、犬にはどうして無いのでしょうか」と質問をしました。趙州は「犬には前世の行いがあるからです」と答えました。

け出すことができない。趙州の返答は、ことさらに知的に解明できないよう僧を導いている。そこに僧が気づけば、有無の教えを会得する糸口となる。理解としての有には、理解としての無が対抗し、決着のつかない誤謬に陥ることとなる。趙州本人が有無の矛盾した両見解を説くことで、有無を分別する誤りを明らかに示している。説示を聞く学人が、ある時は有、ある時は無というは矛盾ではないか、と考えたならば、趙州の思う壺にはまったことになる。それこそが趙州の狙いであつたといえよう。目前の事実こそが真実であると識ることができれば、犬に仏性があるなしを思慮することなど、元より必要のないことと解るはずである。有見・無見の両所を断ずることで、知解の領域に留まる誤りを端的に指摘したのである。

【頌】 頌曰。狗子佛性有狗子佛性無。直鉤元求負命魚。逐氣尋香雲水客。嘈嘈雜雜作分疏。平展演大鋪舒。莫怪儂家不愼初。指點瑕疵還奪壁。秦王不識藺相如。

【訓読】 頌に曰く。狗子仏性有 狗子仏性無。直鉤元命に負く魚を求む。氣を逐い香を尋ぬ雲水の客。嘈嘈雜雜分疎と作す。平に展演し大に鋪舒す。怪むこと莫れ儂が家初めを慎しまざること。瑕疵を指點して還つて壁を奪う。秦王識らず 藺相如。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいいました。趙州は「狗子仏性有、狗子仏性無」のことばを用いて、真つ直ぐな釣ばりにかかるような、希な魚を求めました。文字や言葉に振り回されている雲水は、有と無に迷って分別をおこし、心が収まることなく、せわしく考えを巡らせています。趙州は、分別を離れたところで説法をしており、誰にも平等におしみなく真実を伝えていきます。有と無はいかにもいい加減なその場限りの返答にみえますが、心配には及びません。喩えるなら、藺相如が秦王に「璧に疵有り」といつて誑かし、まんまと無疵の璧を取り返したようなものです。僧達は「有無」の言葉をから離れることができませぬ。それは、秦王が無疵の璧であることを知らずに藺相如と対面し、その意図を見抜けなかったのと同じことです。

【釈意】

本則では、趙州が「狗子仏性有、狗子仏性無」の語句を用いて、ことばに捉われることで、分別に心を滞らせてはならないことを論じている。理知から離れられず、分別に終始するなら、どこまでも対立が続き、心が落ち着くことがない。仏道修行とは、様々な分別に揺れる心を脱して、欲望執着に動くことのない自己を確立することといえる。

秦王は、璧が無疵であることを知らず、璧を取られても惜しむことがなかった。疵の有無に捉われ、分別を持っていたので、藺相如の虚言に迷い、真実を見抜くことができなかった。分別を捨て、真実を見極めることができたなら、疵の有無に迷い、宝を盗られることはなかったのである。それは、学人達が趙州の意図に気づかず、有無に縛られている姿と同じである。

【語彙】

【趙州】趙州從諗（778〜897）のこと。山東省曹州郝郷の人。俗姓は郝氏。南泉普願の法嗣。【一切衆生皆有仏性】一切の衆生に仏性が具わっているの意。【業識】根本無明の力によって生じた不覚の心のこと。【直鉤元求負命魚】姜子牙の故事の引用。

『従容録』の頌の後に、「直鉤釣鱗龍。曲鉤釣蝦蟆。」(『大正蔵』48、238c)の語句がある。これは、まっすぐな鉤は、仏性を得た本来人(黒い龍)を釣るものであり、曲がった鉤は、悟っていない者(蛙・凡夫)を釣りあげるという意である。【嘈嘈雑雑】騒がしく、一向になっていないこと。【指点瑕疵還奪璧】『史記』藺相如の故事の引用。

第十九則 雲門須弥

【本則】 擧。僧問雲門。不起一念。還有過也無。門云。須彌山。

【訓読】 挙す。僧 雲門に問う、不起一念、還つて過有りやまた無しや。門云く、須弥山。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。僧が雲門文偃に「心に動きが全く起こらない境地は、誤りでしょうか、正しいのでしょうか」と質問をしました。雲門はただ「須弥山」とのみ答えました。

【釈意】

僧が、心の中に分別・執着などの想いが起こらないとしたら、その心境はかえって誤りなのでしょうか、それが正しいのでしょうか、と雲門文偃に質問をしている。不起一念を質問しているにもかかわらず、過の有無を問うのは、起こることは過が有り、不起は過無しとの分別にとらわれており、自己の心の在り方に優劣を観ていると告白しているようなものである。

悟りに意識を向けている自己を離れなくては、本来の面目を得ることはできない。しかし、心が動かないことのみを求めて実現したとしてもそれが悟りとはいえない。対象を覚知して心に動きの

起こらない人など有るはずがない。諸法実相の覚知がなければ、真実の会得には到達しない。雲門が「須弥山」と答えたのは、須弥山がこの世界に「唯一」であるように、自分の存在の真実は而今ここに在る自己のみと示したのである。

是非を問う僧に対して、雲門は思慮分別を離れて、自己とは今の自分のみと示すために、須弥山と譬えたのである。期待した返答とは全く異なる「須弥山」を、是非分別のない自己確立の意味と会得したなら、この僧は悟入できたのであろうが、その結末までを記さず、読む者をして悟りの擬似体験に陥らないよう導くのが宏智の親切でもある。

〔頌〕 頌曰。不起一念須彌山。韶陽法施意非慳。肯來兩手相分付。擬去千尋不可攀。滄海闊白雲閑。莫將毫髮著

其間。假雞聲韻難謾我。未肯模胡放過關。

〔訓読〕 頌に曰く。不起一念須弥山。韶陽の法施意慳むに非ず。肯い来らば兩手に相分付せん。擬し去らば千尋攀く可からず。滄海濶く白雲閑かなり。毫髪を將つて其の間に著くること莫れ。仮鶏の声韻我を謾じ難し。未だ肯えて模胡して関を放過せず。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。「不起一念」の質問

〔釈意〕

本則で雲門が「須弥山」と、一言で答えているが、それは、悟り

に、雲門が「須弥山」と答えました。雲門は懇切に教えを説いたのであり、決して惜しんで法を説かなかつたのでありません。すぐにそのことが分かれば、両手で余すところなく全ての教えをつかむことになり、疑う心が起こるならば、須弥山に登り、真の自己を会得することとは永遠にできません。

滄い海はどこまでも広く、空には白い雲がゆつたりと浮かんでいます。このようなありのままの世界に毛筋ほども我見を入れてはいけません。故事では鶏の鳴きまねで、孟嘗君は関所を通過できましたが、雲門にごまかしはきかないように、衲（宏智）にもごまかしはきません。これまでに、仏法の関門を曖昧なまま通過できた人はいないのです。

【語彙】【雲門】雲門文偃（864～949）。嘉興（浙江省）の人。雪峰義存に参じ、その法を嗣ぐ。【須弥山】古代インドの宇宙説によれば、世界の中央に山があり、その山のこと。【韶陽】雲門文偃の異称。【仮鶏声韻】『史記』孟嘗君の故事の引用。【樸胡】ごまかし。

の境地を言葉で説明すれば支離滅裂になり、余計に修行者の混乱をきたすため、敢えて関わりのない一言で答えたのである。そこに真実の在り方が示されている。悟入する目的を持った修行ならば、結果として何も得ることができない。真の自己の会得には、徹底して思慮分別を除くことが肝要であり、ごまかしや真似事では通用しないことをよく知らねばならない。

第二十則 地蔵親切

【本則】 擧。地蔵問法眼。上座何往。眼云。迤邐行脚。藏云。行脚事作麼生。眼云。不知。藏云。不知最親切。眼豁然大悟。

【訓読】 挙す。地蔵法眼に問う、上座何くにか往くや。眼云く、迤邐として行脚す。藏云く、行脚の事作麼生。眼云く、不知。藏云く、不知最も親切。眼豁然として大悟す。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。地蔵桂琛が法眼文益に問いました。「あなたはどこへ行こうとしているのですか」と。法眼は、「仏道を求めて修行しています」と答えました。すると地蔵は、「修行とは何ですか」と尋ねました。法眼は「修行をことばでは表わしません」と応えました。地蔵が言いました。「あれこれと区分けすることはない、わからないということが適切なのです」と。法眼は言下に大悟したのです。

【釈意】

何処に行こうとしているのか、という問いは、修行をどのように捉えているのかという問いでもある。今を離れて、仏の世界という理想世界に行こうとしているのならば、その修行そのものが誤りである。仏法の「智」とは、論理的知識を指すのではない。知を捨て去った時、現れてくる「智」を不知といい、空と呼ぶ。本則はその「不知」がテーマであり、「わからない」と訳されることが多いが、不明なのではなく、知識や論理・分別の及ばないことをいうのである。論理による追求は対立を避けることができない。善に対して悪が提示されるごとくである。そのような知識や分別を超えて、ことばでは表現できない「不知」こそ修行を表す

— にふさわしいことばなのである。

【頌】 頌曰、而今參飽似當時。脱盡廉纖到不知。任短任長休剪綴。隨高隨下自平治。家門豐儉臨時用。田地優游

信步移。三十年前行脚事。分明辜負一双眉。

【訓読】 頌に曰く、而今 參じ飽いて當時に似たり。廉纖を脱尽して不知に至る。短に任せ長に任せて剪綴することを休

めよ。高きに随い下きに随つて自ずから平治す。家門の豊儉は時に臨んで用う。田地優游歩に信せて移す。三十年前の行脚の事、分明に辜負す 一双の眉。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。いま了悟してみれば
悟る前の自分と変わりません。微細な迷いの心を
すっかり無くして不知に到達しました。今の自分を
あるがままにまかせればいいのです、取り繕うのを
止めなさい。自分の位置付けを自覚して、不平不満
の心を起こすことなく修行するのです。家が豊か
ある時はそのように暮らし、家が貧しい時はそれに
応じて暮らすようなものです。物事の状態に随つ
て、こだわりなく、あるがままに進むことです。三
十年前に行脚を始めた時の想いは、間違っていたこ

【釈意】

長い修行を経てきた法眼が、機縁熟して了悟に至った。悟道して
みれば、これまで思い描いていた仏とは異なり、自身が仏であ
り、煩惱の世界と生きていたこの世界が仏の世界そのものであ
た、と明確に了智した。悟りの前と悟りの後と、自身の姿が何ら
変わっていないことが明らかになったのである。

とがはつきりと解りました。本当は今の自分がそのまま仏であり、この世界が仏の世界だったので。

【語彙】

【地藏】地藏桂琛（867〜928）羅漢桂琛とも。玄沙師備の法嗣。【法眼】法眼文益（885〜958）法眼宗の祖。大法眼禪師。【廉纖】微細なこと。ここでは煩惱。【剪綴】剪は長をきりとること。綴は短を綴り補うこと。【豊儉】豊は豊饒、儉は儉約の略。【辜負】孤負と同じ。背くこと。【迤邐】たわまず。つずけて。【親切】びったり、当っている、適切。

第二十一則 雲巖掃地

【本則】擧。雲巖掃地次。道吾云。太區區生。巖云。須知有不區區者。吾云。恁麼則有第二月也。巖提起掃箒云。

這箇是第幾月。吾便休去。玄沙云。正是第二月。雲門云。奴見婢殷勤。

【訓詁】

一挙す。雲巖掃地の次、道吾云く、太区區生。巖云く、須らく知るべし。区區たらざる者有ることを。吾云く、恁麼ならば則ち第二月ありや。巖掃箒を提起して云く、這箇は是れ第幾月ぞ。吾便ち休し去る。玄沙云く、正是れ第二月。雲門云く、奴は婢を見て殷勤。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。雲巖曇晟が庭掃除をしていた時のことです。道吾円智が声をかけました。「ずいぶん掃除を頑張りますね」。雲巖が言いました。

【釈意】

第一月は真実の月、これを見た柄の認識が第二月である。掃除をしている姿がそのままの姿で、別に「真の自己」があるのではない。仏という第一のわたしと、今の自分という第二わたしがあ

「働くことのない者がいることを知らねばなりませんよ」と。道吾がいきました。「もしそれならば第二月というものがあるのですか」。雲巖は箒をまっすぐに立てて応じました。「これは第何番目の月ですか」。道吾はそこで黙り込んでしまいました。それを聞いて玄沙が云いました。「正しくそれが第二月です」。また、雲門がいきました。「使用人の男女の交際は、主人の関知するところではありません」と。

るかのような雲巖のことばは、誤解を生む要素を含んでいた。道吾は第二の月と行ってそのことを質したのである。雲巖はそのことに気づいて、ただこの自己のみと箒を立てて示したのである。そして、雲巖の問いに対して道吾が沈黙したのは、第一と応じれば、第二、第三を生み出して、不終焉の誤謬に陥るからである。すべてを包括して「ただひとつ」であるから、沈黙しかなかったのである。雲巖の問いは道吾を誘い込む罠である。黙したのは道吾が既に分別を離れていたからでもある。雲巖も道吾も悟達の人であるが、玄沙師備と雲門文偃はこの問答に厳しい目を向けている。

玄沙は、そんな問答では本来の仏法を表したことになる、といい、雲門も、真の仏法（主人）とは関わりのないこと（使用人の交際）であり、低次元の問答だと断じた。

【頌】 頌曰。借来聊爾了門頭。得用随宜即使休。象骨巖前弄蛇手。兒時做處老知羞。

【訓読】 頌に曰く。借り来たつて聊爾として門頭を了す。用うることを得て宜しきに随つて即使ち休す。象骨巖前に蛇を弄するの手、兒の時の做處、老いて羞を知るや。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。たまたま掃地という日常の行為を用いて、心の中をすっかり掃除しました。この問答によって、眼は見る働きがあり、舌は味を覚知する働きがあるように、六根すべてに同じなのです。そこに分別は生じません。二人の問答を手厳しく批判した玄沙と雲門ですが、その昔、象骨峰で雪峰義存に杖を蛇に見立てる作略を弄したことを忘れたのでしょうか。

【釈意】

この公案は、禅院の庭掃除に例えて心の掃除を取りあげながら、雲巖、道吾、雲門、玄沙四人の話の中で展開したものである。眼には見る働きがあるものの、そこで美醜が分別されるのではない。舌には味を覚知する働きはあるが、美味、不味を舌が分別することはなく、六根すべてに同じであり、修行も迷悟が付随しているのではなく、悟りは仏、迷いは凡夫と、自身が分別を加えているだけである。雲巖の問いに道吾が黙したのは適切であった。宏智は、二人の問答を手厳しく批判した玄沙と雲門の二人は、修行を積み重ねて今日に到ったのを忘れたのであろうか。雪峰義存に杖を弄したことを忘れたとはいわさないと、雲巖と道吾を擁護している。

【語彙】

【第二月】もともと『円覚経』の話に、「妄りに四大を認めて自らの身相と為し、六塵の縁影を自らの心相と為す。彼の病目の空中の華と、及び第二の月とを見るに響う。空は実に華なす、病者の妄執なり」とある。衆生が迷いに陥ったことをいう。【雲巖曇晟】(780〜841) 多年にわたって百丈懷海に参じてのち、葉山惟儼の法弟。曹洞宗の祖洞山良价の師。無任大師。【道吾円智】(769〜835) 葉山惟儼に嗣法した。雲巖曇晟の法弟。【玄沙師備】(831〜906) 雪峰義存の法嗣。当時の叢林では稀に馬祖道一の馬大師、南泉普願の王老师、徳山宣鑑の周金剛と同じく、俗姓を呼んで謝三郎と称される。宗一大師と諡す。【雲門文偃】(864〜949) 雪峰の弟子で雲門宗の開祖。【象骨巖】雪峯山にある象の骨の形に似た岩がある。ここでは雪峯義存を指している。【弄蛇手】第二十四則の話に、雪峯の投じた一条の鼈(亀) 鼻蛇の話に、玄沙・雲門の両人が様々に反応して見せた。その故実を指している。

第二十二則 巖頭拝喝

【本則】 擧。巖頭到徳山。跨門便問。是凡是聖。山便喝。頭禮拜。洞山聞云。若不是豁公。大難承當。頭云。洞山老漢不識好惡。我當時一手擡一手捺。

〔訓読〕 挙す。巖頭 徳山に到る。門に跨つて便ち問う、是れ凡か是れ聖か。山 便ち喝す。頭 礼拝す。洞山聞いて云く、若し是れ豁公にあらずんば、大に承当し難からん。頭云く、洞山老漢 好悪を識らず。我れ当時 一手は擡げ 一手は捺う。

〔和訳〕

諸君、よく聴きなさい。巖頭全豁が徳山宣鑑の所に到り、門に片足を入れてすぐに問いました。この状態は迷いですか、それとも悟りですか、と。徳山はすぐに一喝しました。巖頭は喝の意図を理解して、三拝しました。洞山がそれを聞いて言いました。もしも巖頭でなかったならば、この喝を理解することは出来なかつただろう、と。巖頭がいました。洞山老は何が良く、何が悪いか見分けておられないのです。衲はあの時、片方の手では持ち上げて、片方

宏智禪師頌古百則の研究 (二) (佐藤)

〔釈意〕

巖頭全豁は徳山宣鑑の優れた弟子の一人である。徳山のもとにやってきて、凡夫か仏か、の問いを發した。片足が寺内にあり「仏」を示し、片足は門外にあつて世俗を示す。徳山は、突然の問いに「喝」と応じて、そのような分別を離れなければ仏法の心髓は得られないと、自在の応対をみせて巖頭の妄想を打破した。そこで巖頭は問答終了の三拝をしたのであるが、それを聞いた洞山が、「さすが巖頭だ。徳山の教えを会得している」と褒め上げた。賞賛された巖頭は、洞山老も本当のところかわかつていない、と思わず本音を漏らしてしまった。拾と捺の意味は、半分は

では押さえていたのです。

【頌】 頌曰。挫來機。總權柄。事有必行之威。國有不犯之令。賓尚奉而主驕。君忌諫而臣佞。底意巖頭問徳山。一擡一捺看心行。

【訓読】 頌に曰く。來機を挫き、權柄を総ぶ。事に必行の威あり、國に不犯の令あり。賓は奉を尚んで主驕り、君は諫を忌んで臣佞す。底の意ぞ巖頭 徳山に問う。一擡一捺の心行を看よ。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいいました。來參の学人の勢いを挫き、教え導く主導権を握りました。事に対処して必ず達成しようとすると強い力は必要ですが、国には犯してはいけない法令があります。また客が腰を低くすれば主人は傲慢となり、君主が諫められるのを嫌えば家臣がとりいります。巖頭が徳山に問った意図はどこにあるのでしょうか。片方は持ち上げ、片方は押さえるというその意を正しく知らなければなりません。

一 師に随い、半分は自分を捨てていない状態といえる。

【釈意】

徳山は巖頭の勢いを「喝」の一声で削ぎ、法の要諦を示した。宏智は、巖頭と徳山の關係を威力と法令で示し、洞山と巖頭を客と主人、徳山と巖頭を君主と家臣の關係で示した。物事を行う時には相手を屈服させるような力（徳山の喝）が必要であるが、一方で、守るべき規範（巖頭の礼拝）もある。賓（洞山）があまりにも褒めそやしたので、主（巖頭）は畏にはまって本音を吐いた。横暴な君（徳山）とおもねる臣（巖頭）のように見えるのであるが、巖頭の本當の意図はどこにあるのであろう。巖頭が洞山のとばに触発されて、往時の自分は不完全であったと振り返っている。本来、修行の過程では自分勝手な想いを捨てて、弟子として師の教えをすべて受領するものの、一方で、接化の方途においては師の跡をただ辿るものではない。巖頭には巖頭の個性があり、

それで巖頭なのである。教えを受けて巖頭が徳山になつてはいけないのである。巖頭は、当時から今に到るまでの修行の積み重ねがあつて、真の自己を了畢できたのである。

【語彙】

【巖頭】巖頭全齡（828～887）諡号は清巖大師。俗姓は柯氏。泉州の人。徳山宣鑑の法嗣。鄂州の巖頭院に住す。【徳山】徳山宣鑑（782～865）諡号は見性大師。俗姓は周氏。劍南の人。龍潭崇信の法嗣。【洞山】洞山良价（807～869）曹洞宗の派祖。諡号は悟本大師。雲巖曇晟の法嗣。洪州の洞山に住す。【権柄】物の大小軽重を測る具。ここでは物事を随意に処理する威力のこと。

第二十三則 魯祖面壁

【本則】

擧。魯祖凡見僧來便面壁。南泉聞云。我尋常向他道。空劫已前承當。佛未出世時會取。不得一箇半箇。他恁麼驢年去。

【訓読】

挙す。魯祖 凡そ僧の来るを見て便ち面壁す。南泉聞いて云く、我 尋常他に向かつて空劫以前に承當せよと。仏未出世せざる時に會取せよと道うすら、一箇半箇を得ず。他 恁麼なれば驢年にして去らん。仏

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。魯祖宝雲は修行者が来ると壁に向つて坐禅をくむのです。その事を聞いた南泉普願は言いました。衲はいつも、修行僧に対して説示するのですが、「真の自己を天地がまだ誕生する

【釈意】

魯祖宝雲は修行者の前では、壁に向つてただ面壁をするだけなのである。魯祖は禅の修行は、文字や言葉ではなく、面壁こそ真実の姿であるということをも、伝えようとしている。

しかし、魯祖の接化は面壁するだけであることを聞いた南泉は、

前に会得しなさい。仏がまだこの世に出現する前に会得しなさい、と。それでも弟子の一人、二人を得ることすらできません。このままでは、魯祖はいつまでも弟子を得ることができないでしょう」と。

【頌】 頌曰。淡中有味。妙超情謂。綿綿若存兮象先。兀兀如愚兮道貴。玉彫文以喪淳。珠在淵而自媚。十分爽氣

兮清磨暑秋。一片閑雲兮遠分天水。

【訓読】 頌に曰く、淡中に味有り、妙は情謂を超える。綿綿として存するが若くにして象を先んじ、兀兀として愚の如くにして道貴し。玉に文を彫って以って淳を喪い、珠は淵に在って自ずから媚む。十分の爽氣清く暑秋を磨ぎ、一片の閑雲遠く天水を分かつ。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。味が薄いように見えて、実は深い味わいがあり、その優れた様は思慮分別を超えています。

絶えまなく続ける事はすぐれていて、坐禅の様に動かない様は愚かなように見えるのですが、とても重

それだけでは弟子たちには理解しづらいと言うのである。第一義諦としての面壁だけでは弟子達に伝わらないことを意味している。まだ悟りの境地に達していない修行者に面壁の姿を見せるだけでは、その意義は伝わらないのである。分別に迷わない自己の確立を、南泉は「空劫以前」の語や、「仏未だ出世せざる時」で示している。優れた教えを伝えてゆくには方便が必要なのである。

【釈意】

頌では魯祖の面壁を褒め称えている。一句ごと対句であらわしている。一句目では魯祖の面壁は、一見ただ坐るという味気ない接化に見える。しかし、そんなあっさりとした面壁は、すべての分別を捨てているからであり、修行に於いては、これほどまでに優れたものはない、というのである。坐ることに、言葉や文字はい

要なことでもあるのです。

宝玉に彩りを彫ることで、本来の輝きを失ってしまいます。珠は淵に在ってこそ自ら輝くのです。爽やかな空気は十分なほどに、夏の終わりを感じさせ、空に浮かぶ雲は秋風に吹かれて遠くに流れ、空と海を分ける目印となっています。

〔語彙〕

【魯祖】魯祖宝雲のこと。生没年不詳。馬祖道一の法嗣で魯祖山に住した。【南泉】南泉普願（784～834）馬祖道一の法嗣。【空劫以前】天地未開以前の意。有無・迷悟・善悪・凡聖などの相對差別のすべての現象が分かれ起る以前の絶対的存在を指す。法としては本来の自己としても指す。【承当】会得すること、また合点・首肯などの意。【二箇半箇】一人半人と言うのと同じく、きわめて少数の人を言う。箇は個体としてまとまりのあるものを数える量詞。ひとつ、ひとり。半箇は一個の半分。また数の少ないことのたとえ。【驢年】十二支のなかに驢がないことから、永遠に出会われない事を指す。【情謂】情は情識、謂は言謂。分別や言語のこと。【綿綿・兀兀】綿綿は長く続いて絶えまない様のこと。兀兀は坐禅していて、少しも動かない様。【先・貴】先には重んずるや優れているという意味。貴し（たつとし）は重んずる、大切にするという意味。

らないことから、情謂を超えるというのである。二句目では坐禅を続けることが最要であり、一見、愚かなようでも仏道を重んずることなのである。また坐禅はひたすら坐ることに意味があり、彩り、つまり文字や言葉は必要ないことを三句目ではいつている。最後では夏が終わり秋になる変わり目や、海と空の境目がわかるくらい、面壁ほどわかりやすく、理解しやすいことはないと言っている。

ここまで魯祖の面壁を賞賛するのは、宏智自身の禅観である黙照禅と、相通じる点があったからであろう。

第二十四則 雪峰看蛇

【本則】 擧。雪峰示衆云。南山有一條鼈鼻蛇。汝等諸人。切須好看。長慶云。今日堂中。大有人喪身失命。僧學以玄沙。沙云。須是稜兄始得。然雖如是。我即不恁麼。僧云。和尚作麼生。沙云。用南山作麼。雲門以拄杖。攬向峰面前作怕勢。

【訓読】 挙す。雪峰衆に示して云く。南山に一條の鼈鼻蛇あり、汝等諸人切に須らく好く看るべし。長慶の云く、今日堂中、大いに人有りて喪身失命す。僧、玄沙に拳似す。沙云く、須らく是稜兄にして始めて得る。然も是の如くなりと雖も、我は即ち不恁麼。僧云く、和尚作麼生。沙云く、南山を用いて作麼とせん。雲門、拄杖を以つて峰の面前に攬向にして、怕れる勢を作す。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。雪峰義存が大眾に向つて言いました。この雪峰山に一匹の亀の頭の様な毒蛇がいるので注意深く観察をなさい、と。長慶がいいました。今日伽藍内にいる修行僧は、皆凡夫の身を離れ、仏心を具現しているのです、と。ある僧がそのことを玄沙師備に告げに行つたところ、玄沙は言いました。長慶和尚だからこそ、そのように答える

【釈意】

この則での毒蛇とは煩惱や迷いの世界と思いがちであるが、ここでは誰もがもっている悟りの境地や仏性のことである。雪峰は弟子たちに、僧堂内の誰もが持つている仏性を、修行によつて自ら会得するように言うのである。その問いにいち早く答えたのが長慶慧稜である。長慶は僧堂内にいる修行者全員に仏性があると答えた。

しかし、次に答えた玄沙は、誰もが持つている仏性は普遍で、こ

ことができたのでしよう。長慶和尚が言う事ももつともですが、衲の考えは違います、と。その僧が聞きました。玄沙和尚ならどのように言うのですかと。玄沙は答えました。南山にいる修行僧だけが仏性をもっているのではないのです、と。また、雲門文偃は持っていた拄杖を雪峰の前に投げ捨てて、怖がった素ぷりをしました。

の世界は仏の世界そのものだからこそ、雪峰山に居る者のみが持つのではないと主張したのである。仏性は修行道場だけでなく、この世のすべての人々にも具わっているのである。さらに雲門は拄杖をわざと投げ捨て、怖がった素ぷりをした裏には、悟りの境地を得ても、そこにとどまらない意味を示している。拄杖は毒蛇のことであり、仏性のことでもある。修行僧は拄杖を手放さないものであり、投げ捨てたという事は、悟りを得てもそこにとどまらないことを意味している。それは悟りの境地に惑わされないことでもある。悟りの境地に惑わされず、留まらないで修行を継続すること（仏向上）が重要なのである。

【頌】

頌曰。玄沙大剛長慶少勇。南山鼈鼻死無用。風雲際會頭角生。果見韶陽下手弄下手弄。激電光中看變動。在我也能遣能呼。於彼也有擒有縱。底事如今付阿誰。冷口傷人不知痛。

【訓読】

頌に曰く。玄沙は大剛、長慶は少勇。南山の鼈鼻死して用なし。風雲際会して、頭角生ず。果たして見ん韶陽手を下して弄することを。手下して弄す。激電光中の変動を見る。我に在るや、能く遣り、能く呼ぶ。彼に於いてや擒有り、縦有り。底事ぞ如今阿誰に付す。冷口は人を傷けども、痛みを知らず。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。玄沙は強い人で長慶は勇気があまりない人です。雪峰が示した仏性（鼈鼻の毒蛇）は、二人の前ではすでに死んでいて用はないのです。雲と風が出会うことで虎や龍が躍り出ます。はたして雲門が拄杖を持って弄びますが、それは見事な手際です。雲門は雪峰の問いに対応したのですが、雷鳴の如く、光のように早い変わりようでの対応だったのです。雲門は、雪峰の放した毒蛇を呼びよせ、捉えて思うままにしたのです。この手際を今誰に付しましょうか。冷たい蛇の口は人を傷つけますが、痛みは無いのです。

〔語彙〕

【雪峰】雪峰義存（822～908）姓は曾氏。徳山宣鑑の法嗣。【長慶】長慶慧稜（854～932）姓は孫氏。雪峰義存の法嗣。【玄沙】玄沙師備（835～908）姓は謝氏。雪峰義存の法嗣。また、第二十一則にも登場。【雲門】雲門文偃（864～949）姓は張氏。雪峰義存の法嗣。また、第十一則にも登場。韶陽は雲門の異称。【鼈鼻】ハナベチャの蛇、三角頭の毒蛇の事。【擲向】擲はなげうつこと。手に持っているものを投げ捨てる事。【拄杖】身体を支える杖の事。禅僧が持つ長い杖。錫杖と同じ。【喪身失命】身命を喪失すること。仏法のために身命を抛うつ事。また、身心も命根もみなことごとく脱落すること。【頭角生ず】煩惱の念が起る事。また波と波がぶつかり合って出来た頭角のたとえとも。この則では長慶と玄沙の二人の答えを示している。【如今阿誰】如今は今、阿誰は誰の意。【風雲際会】「雲は龍に従い、風は虎に従う、聖人作つて萬物親ゆ」による。際は時、会は遇の意。竜虎も風雲に際会しないと、その能力を十分に發揮する事が出来ない事。時運に巡り合うとも。

〔釈意〕

頌の始めにある長慶と玄沙の評価はただの優劣ではなく、二人の答えはどれも優れているが、今一步及ばないことを指している。その意味で、二人の前では雪峰が示した教えは生かされず、毒蛇は死んでしまうのである。しかし雲門が拄杖を投げたことで状況が一変するのである。雪峰が放つた毒蛇を見事に捕まえたのが雲門であった。雲門の採つた行動は正に雪峰が放つた蛇を捕らえる答えだったのである。冷口は雪峰が示した蛇の事である。仏性は誰にも具わっているものであるが、そのことに誰もが気づいていない。蛇の口は人を傷つけても痛みはないとは、このことをいっているのである。

第二十五則 塩官犀扇

【本則】 擧。鹽官一日喚侍者。與我過犀牛扇子來。者云。扇子破也。官云。扇子即破。還我犀牛兒來。者無對。資福畫一円相。於中書一牛字。

【訓読】 挙す、鹽官一日侍者を喚ぶ。我ために犀牛の扇子を過ごし來たれ。者云く、扇子破れぬ。塩官云く、扇子既に破れなば、我に犀牛兒を還し來たれ。者對うる無し。資福は一円相を画き、中に一つ牛の字を書す。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。塩官はある日、侍者を呼んでいいました。「柄に犀牛の扇子を持ってきてください」と。侍者は答えました。「扇子はすでに破れてしまいました」。さらに塩官は言います。「扇子が破れてしまったならば、その破れた扇子の牛の骨を持つていらつしやい」と。侍者は答えられませんでした。資福は一つの円相を描き、その中に「牛」の一文字を書きました。

【釈意】

塩官はいつも傍らにいる侍者を呼び、修行の成果を犀牛の扇子と表現して聞くのである。侍者は、修行が完成し、本来の自己を会得した、と答えたのである。さらに塩官はそれを確認するため、修行が完成したのならば、その成果を見せなさいと言うのである。扇の骨とは、虚妄分別がなくなった後の自己をいう。

しかし、塩官の問いに侍者は答えられなかった。つまり、この時点で侍者は悟りの境地にとどまってしまうっており、その後のことを考えていなかったのである。塩官の質問に答えられなかった侍者に代わって、資福は円相を描き、その中に「牛」の字を書くのである。

円相は完成、つまり悟りの世界を表している。しかし、単なる完成ではなく、故意に不完全な円を描き、円相の内に痕跡を残して、未完を表現することも多い。それは、悟りの境地に達しても、そこにとどまらず、更に修行を続けること（悟後の修）を伝えているのである。

【頌】 頌曰。扇子破索犀牛。捲擥中字有來由。誰知桂轂千年魄。妙作通明一點秋。

【訓読】 頌に曰く。扇子破れて犀牛を索む。捲擥中の字に來由有り。誰か知らん桂轂千年の魄。妙に通明一点の秋と作す。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。扇子が破れて、犀牛の骨を探します。円相の中に字を書いたことには由來があるので。誰が知っているでしょう、月千年の光は、この上なくすっきりとした秋を作るということを。

【釈意】

塩官は侍者に対して犀牛の扇子という表現で修行の成果、つまり悟りの境地を表すことをせまったのである。しかし、侍者は最終的に塩官の問いに答えられなくなった。そして資福は、円相の中に牛の一字を書いたのである。捲擥中の字とはこのことである。

捲擥は円相を示し、そこに字を書いたことを指す。

次の桂轂も円相を意味し、千年の魄は長い年月のことであるが、いつの時代も変わらない真理、つまり仏法のことである。そして通妙一点は資福が円相の中に字を書いたことを意味している。

どんなに長い間修行し、悟りを得ても、そこにとどまってい

真に仏法を会得したことはないのである。資福が円相の中に字を書いたように、悟りを得てもそこにとどまらず、悟後の修へと進むことが出来ていれば、侍者は塩官の問いに答えることが出来たであろう。

〔語彙〕

【塩官】塩官齊安（？〜843）姓は李氏。馬祖道一の法嗣。【資福】資福如宝のこと。資福貞遂の法嗣。【犀牛の扇子】犀角を骨子とした扇子の事。【牛児】牛は仏性、あるいは本来の面目にたとえて用いる。【捲轡】円相の事。【桂轂】月の異名の事。車輪の事とも。【通明】事理に通達してあきらかなこと。【一点】一つの点。ひとかけらのこと。一で全を表わす。【円相】円い形、またそれを描く事。円相をもつて真如・仏性・実相・法性などの絶対の真理を表す。また悟りの境地。

第二十六則 仰山指雪

【本則】擧。仰山指雪師子云。還有過得此色者麼。雲門云。當時便興推倒。雪竇云。只解推倒不解扶起。

〔訓読〕 挙す。仰山 雪獅子を指して云く。還つてこの色を過ぎ得る者有らんや。雲門云く、当時便ちために推倒せん。雪竇云く、只だ推倒を解して扶起を解せず。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。仰山慧寂が雪ダルマを指して言いました。「この雪ダルマの白さより白い者が誰かいるだろうか」と。雲門は言いました。「その

〔釈意〕

この色を過ぎる者という仰山のことには陥穽がある。比較がそこに示されているからである。これより白い者が現れば、より白い者が現れて際限がなくなる。そのような分別を捨てること

時そこに居たなら雪ダルマを潰して形を無くしたものを」と。さらに雪寶重頭は言いました。「雲門は押し潰すことは知っていますが、雪ダルマを起こしあげることを知りません」と。

【頌】

頌曰。一倒一起雪庭獅子。慎於犯而懷仁。勇於為而見義。清光照眼似迷家。明白轉身還墮位。衲僧家了無寄。同死同生何此何彼。暖信破梅兮春到寒枝。涼颺脱葉兮秋澄了潦水。

【訓読】

頌に曰く。一倒一起雪庭の獅子。犯すことを慎んで仁を懐き、為すに勇んで義を見る。清光眼を照すも家に迷うに似たり。明白身を転じ還つて位に墮す。衲僧家ついに寄ること無し。同死同生何れを此とし何れを彼とせん。暖信梅を破り春寒枝に到り、涼颺葉を脱し秋潦水を澄ましむ。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいいました。仰山慧寂が示した庭の雪ダルマを、雲門は推倒し雪寶は扶起しました。

仰山は思いやる心から問いを発し、それに応えた人たちがいます。月の光があまりに眩しくて家路を見

修行の最要と示すための方便である。雲門は、分別の元となる雪ダルマなど倒して潰してしまえという。修行を重ねて虚妄分別を淘汰してゆく往相である。それに対して、雪寶は、倒すだけでは次の展開に繋がらないとして、起こすことができなくてはいけないという。悟道した後は、悟りの世界に留まることなく、此岸に戻つて化道を敷くのである。往相と還相が揃つて仏法は完成するのである。

【釈意】

仰山慧寂は、ここで雲門と雪寶の二人の弟子を介して、仏法の在り方を説いている。仰山の質問に呼応して、雲門は知識や言葉に捉われない在り方を示した。さらに、雪寶が、知識やことばに捉われないのは無論であるが、そのことだけにこだわってはいは、

失つて迷うのに似ています。明白の世界に行くことがあつてもそこに留まつてはいけません。修行僧は何処にも留まるところはないのです。死と生もあれこれと別けることはできません。暖かい風が梅の蕾を開かせれば、春が寒枝に到っていると気づきません。また、涼しい風が木の葉を落とし、沼の淀みが澄めば秋なのです。

再び分別に陥ると示した。春が来れば枝は芽吹き、秋が来たなら葉を落とすように、ありのままに移り変わりゆくのが本来の姿なのである。そこに自分勝手な分別を挟む余地はないのである。

〔語彙〕

【仰山慧寂】(807～883) 広東省の人。瀉山靈祐の法嗣。師の瀉山と資の仰山の山号の頭字をとつて瀉仰宗とした。【雲門文偃】(864～949) 浙江省の人。睦州道蹤、靈樹如敏、広主劉龍に参じた。雪峰義存の法嗣。【雪竇重顕】(980～1052) 四川省の人。雲門宗の智門光祚の法嗣。五年間、雲門宗の祖文偃に宗旨に学ぶ。【推倒】押し倒すこと。転じて一切の用法を奪つてしまふこと。【扶起】扶け起こすこと。宗師家が学人を指導するのに用いる接化の手段。【潦水】水たまり、沼池のこと。

第二十七則 法眼指簾

【本則】 擧。法眼以手指簾。時有二僧。同去捲簾。眼云。一得一失。

〔訓読〕 擧す。法眼 手を以て簾を指さす。時に二僧あり。同じく去つて簾を卷く。眼云く、一得一失。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。法眼文益は何も言わずに簾を指さしました。傍らに居た二人の僧が、同時に簾を巻き上げに行きました。それを見て法眼は言いました。「二人は良いが一人はいけない」と。

〔頌〕

頌曰。松直棘曲。鶴長鳧短。義皇世人俱忘治亂。其安也潜龍在淵。其逸也翔鳥脱絆。無何祖禰西來。裡許得失相半。蓬隨風而転空。缸截流而到岸。箇中靈利衲僧。看取清凉手段。

〔訓読〕

頌に曰く。松は直く棘は曲れり。鶴は長く鳧は短し。義皇世の人俱に治亂を忘る。其の安や潜龍淵に在り。其の逸や翔鳥絆を脱す。何んともすることなし祖禰西來して、裡許得失相い半ばす。蓬は風に随つて空に転じ。缸は流れを截つて岸に到る。箇の中靈利の衲僧、清凉の手段を看取せよ。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいたしました。松は真つ直ぐそびえ、いばらは曲がり育ちます。鶴の足は長く、鴨は短いのです。義皇の世の民は治亂を忘れて生活を営みました。それは淵に潜む龍のように安らです。そ

〔釈意〕

法眼文益は、簾を巻き上げると同じ行為をした二人の僧を、片方は褒め、片方を諫めた。もし、この二人が異なる評価をされたことに迷うならば、是非分別に留まることになる。二人の侍者も読者も法眼の言葉に惑わされてはならない。本来の自己は、相対的な価値判断を超越している。法眼の目的はそこに気づかせることにある。

〔釈意〕

法眼文益は、同じような行為をした二人の僧を片方は褒め、片方は諫めた。異なる評価に心を奪われるなら、それが是非分別に迷うということである。真つ直ぐに伸びた松が良で、曲がりくねるいばらが悪と分けられるものではない。鳥の足の長短も同じあ

して籠を脱した鳥のように囚われがありません。この土地に達磨が西来して以来、有無得失の分別が行われるようになったのです。よもぎの綿帽子が風に乘って空に飛び出すように、また、船が川の流れを横切って対岸に着くように、優れた師の弟子ならば、煩惱なき平穩の境地を会得しなくてはなりません。

る。こだわりを持ち、分別に留まってはならない。また、達磨以前は、悟りの有無は問題にならなかったが、達磨が来て以来、悟りに拘泥する人も現れた。優れた修行僧が法眼の教えを会得すれば、是非分別に迷うことのない平穩な境地を会得できよう。

〔語彙〕

【法眼文益】法眼文益（885～958）地蔵桂琛の法嗣。五家七宗の一つ法眼宗の祖。浙江省余杭の人。育王寺で希寛律師から律を

学ぶ。【羲皇】古代中国の伝説上の帝王。伏羲ともいう。姿は人面蛇身とされ、世を治めた天子。伏羲の在位は百十一年続き、羲皇の民は自然のままの原始生活を平和に暮らしたとされる。【裡許】裏許。ここ、その中の意。許は場所を示す助詞。

第二十八則 護国三麼

【本則】 擧。僧問護國。鶴立枯松時如何。國云。地下底一場麼羅。僧云。滴水滴凍時如何。國云。日出後一場麼羅。僧云。會昌沙汰時護法善神向甚麼處去也。國云。三門頭兩箇一場麼羅。

【訓読】 挙す。僧、護国に問う。鶴枯松に立つ時如何。国云く、地下底、一場の麼羅。僧云く、滴水滴凍の時如何。国云く、日出でて後、一場の麼羅。僧云く、会昌沙汰の時、護法善神いづれの處に向つて去るや。国云く、三門頭の兩箇、一場の麼羅。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。僧が護国守澄に質問しました。鶴が老松に停まっている姿はどのようなものでしょう、と。護国は答えます。「樹の下から見れば不格好で恥さらしです」。僧がまた問います。水滴が一滴一滴凍る姿はいかがですか、と。護国は答えます。「太陽が昇った後は、気温が上がって溶けるので、恥さらしです」。僧が言います。唐の武帝による会昌の破仏では、護法善神はどこに行っていたのでしょうか、と。護国は言います。「護法善神も恥さらしです」。

〔頌〕

頌曰。壯士綾綾鬢未秋。男兒不憤不封侯。

翻思清白傳家客。洗耳溪頭不飲牛。

〔訓読〕

頌に曰く。壯士綾綾として鬢未だ秋ならず。男兒憤ぜずんば侯に封ぜられず。翻つて思ふ清白伝家の客。耳を洗う溪頭牛に飲ませず。

男兒憤ぜずんば侯に封ぜられず。翻つて思ふ清白伝家の客。耳を洗

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。この僧は、白髪もなく威勢のいい青年です。若者は発憤しなければ領主が領土を与えることはありません。対する護国は、

〔釈意〕

修行僧が護国守澄に仏法を求める姿勢を三つ質問する。まず、「鶴が老松に留まっている様」は、修行者が悟りの境地に至った姿を例えている。悟って終わりではなく悟後の修へと踏み出さなければならぬ。また、「水が滴るたびに凍っていく様」は、煩惱の暖気に自分を見失うことのないことである。しかし、理想に執着すれば、たちまち欲望の世界に後戻りとなる。最後に、「武帝の廃仏時、護法善神は何をしていたのか」との問いに、護法善神は三門に立っていただけだと答えている。仏法は理念ではなく、継続した日常の実修があつてこそ機能するのである。

〔釈意〕

この僧はいかにも若く、自分が悟りを会得していることを分かつてもらおうと焦っている。しかし、悟りの姿を考えて体裁を整えても、それは何の役にも立たず、恥を晒しているようなものであ

清廉公正を守って富を捨てた楊震のようです。また、耳を洗って体裁を整える許由を、理想に滞る者として退け、その河の水を牛に飲ませなかった巢父のようです。

る。悟道への想いすら捨てて、ただひたすら修行を行わなければならぬ。

【語彙】

【護国】護国守澄（不詳）洞山下、疎山匡仁の法嗣。【麼羅】梵語の恥さらしの意。【会昌沙汰】唐の武帝による会昌三年（843年）の仏教弾圧。中国仏教の廃仏では最も大規模なもの。【三門頭の両箇】三門は空・無想・無作の三解脱門を表し、山門の意と同じ。両箇は三門に立つ仁王・護法善神のこと。【侯】封建時代の領主。大名の称号。【清白傳家客】清白は清廉潔白の略。【後漢書】家計を守るより清廉潔白を守る信義を子孫に伝えるため富を廃した楊震伝。【耳を洗う溪頭牛に飲はず】『史記』伯夷伝。堯帝から天下を譲るとされた許由は辞して箕山に隠栖するが、再度召されたので、汚れた事を聞いたと川で耳を洗った。そこへ牛に水を飲ませようと巢父通りかかり、そのような水を牛に飲ませられぬと上流に牛を引いて行つたという伝記。

第二十九則 風穴鉄牛

【本則】擧。風穴在郢州衙内。上堂云。祖師心印。状似鐵牛之機。去即印住。住即印破。只如不去不住。印即是不印即是。時有盧陂長老。出問云。某甲有鐵牛之機。請師不搭印。穴云。慣釣鯨鯢澄巨浸。却嗟蛙步詞泥沙。陂佇思。穴喝云。長老何不進語。陂擬議。穴便打一拂子云。還記得話頭麼。試擧看。陂擬開口。穴又打一拂子。牧主云。佛法與王法一般。穴云。見箇什麼。牧云。當斷不斷。返招其亂。穴便下座。

【訓誥】擧す。風穴 郢州の衙内に在って、上堂して云く。祖師の心印、状 鉄牛の機に似たり。去れば即ち印住し、住す

れば即ち印破す。只だ去らず住せざるが如きは、印するが即ち是か、印せざるが即ち是か。時に盧陂長老有つて、出でて問うて云く。某甲鉄牛之機有り。請う師、印を搭せざれ。穴云く。鯨鯢を釣りにて、巨浸を澄ましむるに慣れ、却つて嗟く蛙歩の泥沙に誦することを。陂佇思す。穴喝して云く。長老何ぞ進語せざる。陂擬議す。穴打つこと一払子にして云く。還つて話頭を記得すや、試みに拵せよ看ん。陂口を開かんと擬す。穴又打つこと一払子す。牧主云く。仏法と王法と一般なり。穴云く。箇の什麼を見るや。牧云く。當に断すべきに断ぜざれば、返つて其の乱を招く。穴便ち下座す。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。風穴延沼が郢州の太守の邸宅に招かれて、「祖師の心印（悟り）は、河水の氾濫を防いだ鉄牛の機きに似ています」と説法をしました。「その働きは、去ろうとすれば留まり、留めようとすれば去る。その境地を超えて、去ろうとせず留まろうとしない時を、悟りと認めても良いのでしょうか、いけないでしょうか」と。その時、盧陂長老が出て、「衲は河水の氾濫を防ぐような働き（仏性）を得ています。ですから師を求めて、これ以上、認めてもらう必要がありません」と言いました。風穴は「鯨鯢をいつもなんなく釣りあげて、海

〔釈意〕

風穴延沼は、悟りは鉄牛の働きに似ていると説いている。河の流れを制御するために、禹王が鉄で造った牛を川に沈めた。鉄牛がどのような働きで洪水を防いでいるのか、見ようとしても見えない。これは学人を導くための餌である。盧陂長老が針にかかったが、風穴の指導は予想外で、何も応えられなかった。風穴のことばは「知の分断」を計っている。了悟は知恵ではなく、論理でもない。どのように思考しても、この世界がそのまま仏の世界であり、自分がそのまま仏であることをことばでは説明できないのである。ここでは風穴に一蹴された盧陂長老であるが、名が記されているところを見ると、後日、達悟したのであるうか。ところで、牧主のことばを風穴はどのように聞いたであろう。是

を静かにすることに慣れていきます。ですから、泥水の中で蛙がころげまわっているのを見るのは嘆かわしいことです」といいました。盧陂長老はこれを聞いて考え込みました。風穴は叱って、「(盧陂)長老、何も言わないのですか」と。盧陂長老は言葉を出そうとしました。風穴は、間髪を入れずに払子を振って一打し、「先ほど、あなたが言った言葉を、もう一度言ってみなさい」といいました。長老は、再びことばを出そうとしました。風穴は再び払子を振って一打しました。それを見て、郢州の太守は「仏法も政治も同じですね」といいました。風穴は、「どうしてそのように同じだと分かりますか」と尋ねました。太守は、「判断すべき時に判断をしなければ、あとで混乱が起きます。それは、仏法も政治も同じです」と応えました。風穴は法座から下りました。

【頌】 頌曰。鐵牛之機。印住印破。透出毘盧頂。撞行。却來化佛舌頭坐。風穴當衡盧陂負墮。棒頭喝下。電光石火。歷歷分明珠在盤。眨起眉毛還蹉過。

宏智禪師頌古百則の研究(一)(佐藤)

非の分別を離れる仏法と、是非の判断を必要とする世法を「一般」と評されては下座するしかなかった。

【訓読】 頌に曰く。鉄牛の機。印住印破。毘盧頂撞を透出して行き、化仏舌頭に却来して坐す。風穴衡に当たつて盧陂負墮す。棒頭喝下。電光石火。歴歴分明にして珠盤に在り。眉毛を眨起すれば還つて蹉過す。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。例えば、鉄牛が河水の氾濫を防ぐ働きは、悟りさえも超えているのです。それは、毘盧遮那仏の頭上を超え、人々を導く自由自在の立場に居るのです。風穴が、自在な働きを発揮しましたが、盧陂は、その境地に及びませんでした。ことばで何もう必要がないから、ことばを発する前に払子を振り、喝を下しました。その早さは、目にも止まりません。珠が盆の上を転がるような、変幻自在な風穴の働きは、盧陂との境界の違いを明らかにしました。真実は目を凝らして見極めようとしても、鉄牛のように却つて見えないものです。

〔釈意〕

達道の人は、毘盧遮那仏の頭上を超えたかのような、自由自在な境地にいる。風穴の接化を受けても、盧陂長老は悟りに至ることはなかった。悟りを得ようとするなら、分別を脱して、真実を見極めなければならない。今の自分を正しく捉えることが必要なのである。

〔語彙〕

【風穴】 風穴延沼（896〜973）のこと。餘杭（浙江省）の人。俗姓は劉氏。鏡清道愨、南院慧顛等に参じる。郢州の広惠寺に二十年住した。【郢州衙内】 郢州の太守の官邸。【心印】 仏心印の略。印は印証。師と弟子との心が相い契合し、不二体になること。【狀鉄牛の機】 牛頭は河南、牛尾は河北にあり、禹王が河水の氾濫を防いだといわれる、巨大な鉄の牛。『碧巖録』に、

擒得盧跛跨鉄牛。三玄戈甲未輕酬。楚王城畔朝宗水。喝下曾令却倒流。〔大正藏〕48、177a)と、盧跛に対して風穴が一喝し
た意味が記されている。また、『永平広録』(一〇)に、「鉄牛鎖斷天河水、頂上毘盧脚下隨」とある。鉄牛も毘盧遮那仏も、
自由自在な境地を示している。【盧跛長老】不詳。風穴の隨身か。【牧主】鄂州の太守のこと。【毘盧頂蓮】向上の位に留まら
ないで、向下門のはたらきを示すこと。【負墮】負ける。破れる。【珠在盤】珠が盤の上を走るときは、宛転自在し、少しも罣
礙がない。【眨起】動かすこと。【蹉過】時期を逸してしまふ。

第三十則 大隋劫火

【本則】 擧。僧問大隨。劫火洞然。大千俱壞。未審。這箇壞不壞。隨云壞。僧云。恁麼則隨他去也。隨云。隨他
去。僧問龍濟。劫火洞然。大千俱壞。未審。這箇壞不壞。濟云不壞。僧云。爲什麼却不壞。濟云。爲同大
千。

【訓読】 擧す。僧 大隨に問う。劫火洞然として大千俱に壞す。未審し、這箇壞か不壞か。隨云く壞。僧云く、恁麼なら
ば則ち他に隨い去れるや。隨云く、他に隨い去る。僧 龍齊に問う。劫火洞然として大千俱に壞す。未審し、這
箇壞か不壞か。濟云く不壞。僧云く、什麼としてか不壞なるや。濟云く、大千に同じきが爲なり。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。僧が大隋法真に問いまし
た。「この世界に大火災があり、世界が一度に壊滅
する時、仏の世界も壊滅するのでしょうか、しない

〔釈意〕

大隋法真と龍濟紹修に、僧が「世界に終わりが来た時、仏の世界
も壊れるのか」と質問をしている。僧は分別に滞り、壞か不壞か
の答えを期待しているが、壞と不壞の対立は、最初からない。僧

のでしょうか。大隋「壊滅します」と。僧「もしそうであるならば、この世界と一緒にすべてが壊滅するのでしょうか」。大隋「この世界と一緒にすべて壊滅してしまいます」。僧は、龍濟に問いました。「大火災で世界が壊滅する時、仏の世界も壊滅するのでしょうか」。龍濟「壊滅しません」。僧「どうして壊滅しないのでしょうか」。龍濟「この世界と仏の世界は一体だからです」。

【頌】 頌曰。壊不壊隨他去也大千界。句裡了無鉤鎖機。脚頭多被葛藤礙。會不會。分明底事丁寧瞭。知心拈出勿商量。還我當行相買賣。

【訓読】 頌に曰く。壊と不壊 他に随って去る大千界。句裏了に鉤鎖の機無し。脚頭多く葛藤に礙えらる。会か不会か。分明底の事 丁寧瞭し。知心は拈出して商量すること勿れ。我が当行に相い買賣するに輸く。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。大隋の壊と龍濟の不壊、この世界と一緒に壊滅すること、この世界は仏の世界と一体であり、壊滅しないという教えには、修行僧を落とし入れる畏のようなたらきはあ

に対して大隋と龍濟は、敢えて矛盾したことを提示することで、分別に滞っていることを示した。

【釈意】

相對する關係を代表させた壊・不壊のことは、分別を離れるための端緒であり、とりわけ意味を持たない。仏法を会得している人は、そのことを論じることもない。壊・不壊を離れた、何の分別もないところが、到達すべきところ（悟り）である。そのこと

りません。しかし、(受け取る側は)ことばが多くありすぎて、もの見方がかえって分からなくなっ
てしまいます。理解できても、理解できなくても、
真実そのものです。大隋と龍濟は、誰もが分かるよ
うな丁寧な教えを説いています。仏法がよく分かっ
ている人は壊・不壊を持ち出して、問答をする必要
はありません。真実の値段がついているわたしの店
の商品は、そのまま駆け引きなしで売り買いをする
ので、値段の交渉をしようとすると、あなたは恥を
かくこととなります。

をことばで説明しようとすると、真実が見えなくなる。大隋も龍
濟も、はじめから真実をさらけ出して何も隠していないことを、
「買売するに輸く」といった。

【語彙】【大隋】大隋法真(834〜915)のこと。梓州(四川省)塩亭の人。俗姓は王氏。長慶大安の法嗣。天彭珊口山の竜懐寺、大隋山
に住した。『從容録』、『統藏經』では「大隋」とある。【劫火洞然】『仁王經』護国品五の引用。世界が壊滅する時期をいい、
火の熾んなるかたちをいう。「劫火」は、四劫(成劫・住劫・壊劫・空劫)の壊劫を指す。【龍濟】龍濟紹修(生没年不詳)の
こと。地藏桂琛の法嗣。撫州(江西省臨川)竜濟山に住し、修山主として知られる。「龍齊」とも。『碧巖録』(『大正藏』48、
169a〜c)には、龍濟の内容が含まれていない。【鈎鎖機】人にひっかけ縛りつける仕掛け。【殺】『從容録』写本によって
【嚙】。【知心】気心の知れた人。【商量】問答をし、審議すること。【当行】行は商店の義、当は本の義で本店(天童山)。わが
この店のこと。